蒜山文化財調査報告１

東遺跡Ⅰ

2003

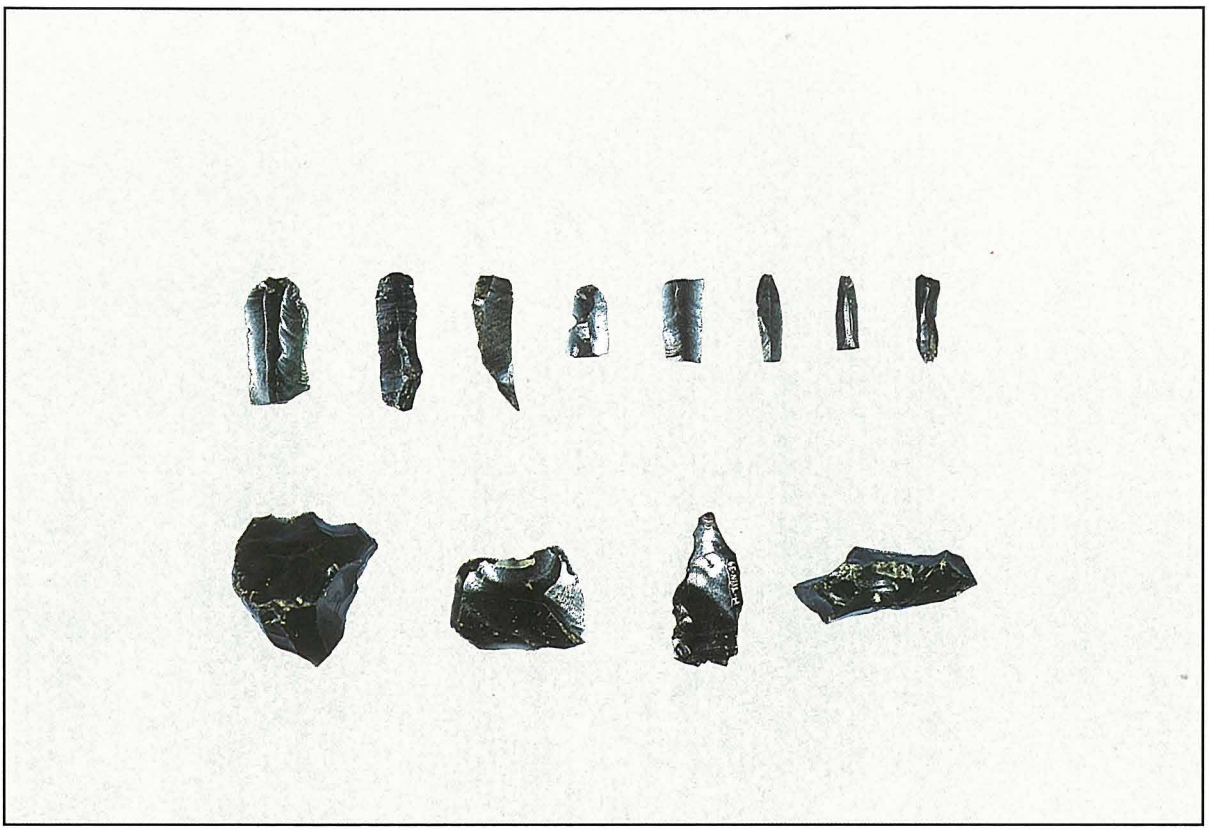
蒜山教育事務組合教育委員会

蒜山文化財調査報告1

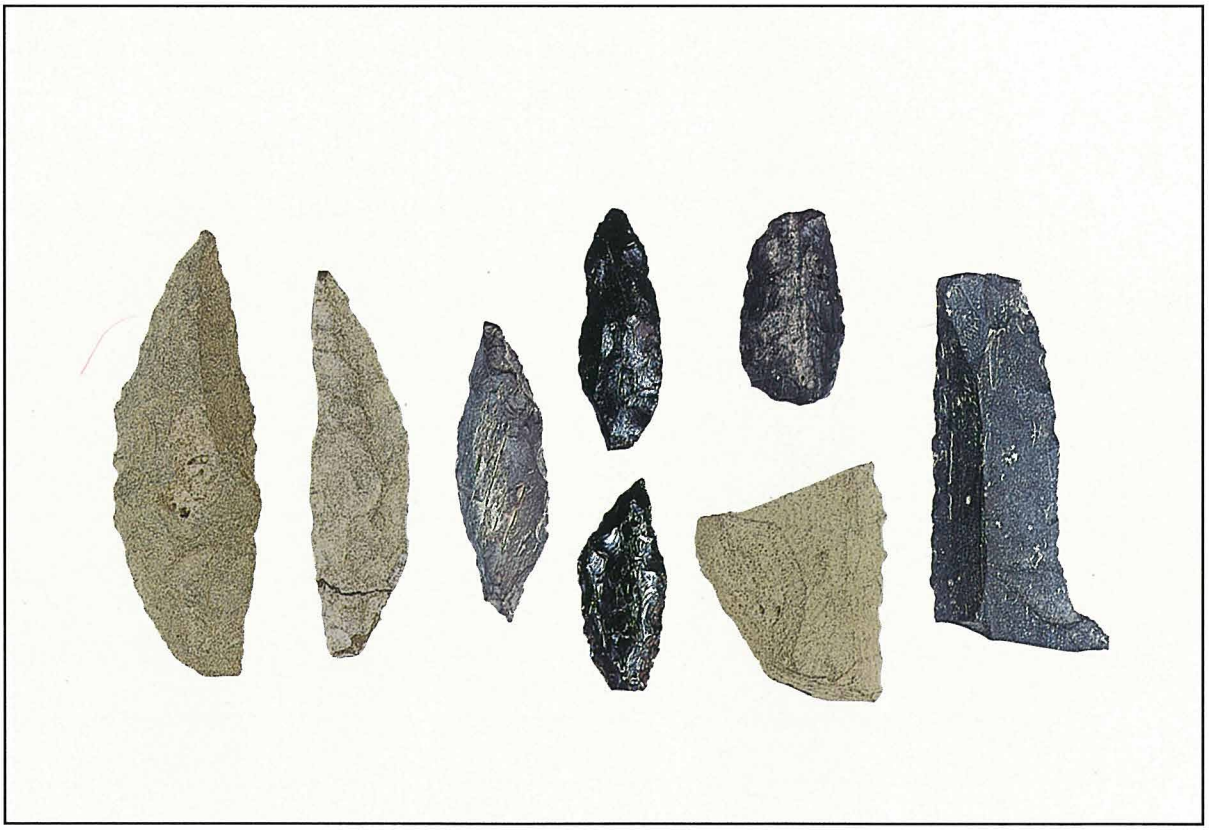
東遺跡Ⅰ

2003

蒜山教育事務組合教育委員会



細石刃石器群の石器



尖頭器石器群の石器

序

蒜山高原は、岡山県の北端、鳥取県との県境地帯に位置します。蒜山三座の裾野で行われるジャージー牛の放牧に代表される牧歌的な風景が人々を魅了し、年間200万人を超える観光客が訪れます。現在のこうした光景からは想像がつきませんが、この高原はかつて湖であり、その名残として珪藻土が地中に厚く堆積しています。この珪藻土の採掘および製品化は、昭和5年に本格的に始まり、今なお当地域の重要な産業の1つに位置付けられております。今回、八束村大字下長田における珪藻土の採掘に先立って、周知の埋蔵文化財包蔵地である東遺跡の確認調査を実施することとなりました。

遺跡全体からすればごく一部の調査にしか過ぎませんでしたが、調査の結果、幸いにも旧石器時代の石器群、縄文時代の落し穴を検出するなど多くの貴重な成果を得ることが出来ました。特に細石刃や尖頭器など出土した旧石器時代の石器は、当時の人々の生活を探るうえで貴重な手がかりとなりました。

1952年に、近藤義郎先生によって行われた四つ塚古墳群の調査に端を発す、蒜山地域の考古学的調査の歴史も半世紀を経過いたしました。その間に多くの発掘調査が行われ、当地域の歴史像についても、おぼろげながらその輪郭を掴めるようになりつつあります。

今回の調査成果を収めた本書も、当地域の歴史のさらなる解明や埋蔵文化財の保護・活用のため、広く活用されることを願う次第であります。また、地域内での利用にとどまらず、学術研究の一助として、研究者の皆様に御活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、調査および本書の作成に際しましては、岡山県教育委員会、八束村役場、昭和化学工業株式会社、岡山理科大学をはじめとする関係機関ならびに地元の皆様から多大なる御指導と御助力を賜りました。記して厚く御礼申し上げる次第であります。

平成15年３月

蒜山教育事務組合教育委員会

教育長　小　谷　哲　夫

例　言

1．本書は、東遺跡（岡山県真庭郡八束村大字下長田30-14番地ほか）の確認調査報告書である。
2．調査は、珪藻土採掘に伴い、国庫補助事業として、蒜山教育事務組合教育委員会が実施した。
3．調査は、蒜山教育事務組合教育委員会職員新谷俊典が担当し、平成13（2001）年６月18日から12月３日まで実施した。調査面積は、332㎡である。
4．調査ならびに本書の作成にあたっては、岡山県教育委員会文化課の松本和男、尾上元規、蒜山文化財保護委員会専門委員の白石純（岡山理科大学自然科学研究所）の各氏から有益なご指導、ご助言をいただいた。また八束村役場、昭和化学工業株式会社、岡山理科大学、池田文宣氏からご支援をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。
5．本書の執筆・編集は、新谷が担当した。
6．自然科学的分析については、白石純氏に依頼し、有益なご教示と成果に関する報告文をいただいた。
7．出土遺物ならびに図面・写真類は、蒜山教育事務組合教育委員会（八束村大字富山根301-1）に保管している。
8．調査ならびに本書の作成にあたり、下記の方々からはさまざまなご支援、ご助言をいただいた。記して厚くお礼申し上げる次第である。（五十音順・敬称略）

稲田孝司　小林博昭　杉山一雄　津村宏臣　仁木康治　西田和浩　濵田竜彦　馬路晃祥
森下英治　安川豊史　行田裕美

凡　例

1．本書で使用した北方位は、第１、２図が真北であるほかは国土座標の座標北を示し、高度は海抜標高である。また第４図のX＝、Y＝の数値は国土座標第Ⅴ系の座標値である。
2．本書に掲載した遺構および遺物実測図、出土遺物写真については、基本的に下記の縮尺である。
遺構実測図 1/80　遺物実測図 2/3(石器)・1/3(土器)　出土遺物写真 約1/2(石器)・約1/3(土器)
3．本書に掲載した遺構実測図で、地層断面のみ掲載しているものについては、図上に地層の示す方位を以下のように略して付している。

東：E（East）　西：W（West）　南：S（South）　北：N（North）

4．遺物番号については、石器、土器に分けて通し番号を付している。土器については通し番号の前に記号P（Pottery）を付している。
5．石器石材の分類については、自然科学的分析の対象となった遺物を除き肉眼観察によるものである。
6．本書に掲載した土器の実測図については、小片の土器が多いため配置が不確実なものが多い。また、土器の上下が不確実なものがある。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　調査および報告書作成の経緯と体制 …… 1
　1　調査にいたる経緯 …… 1
　2　調査および報告書作成の体制 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
第３章　発掘調査の概要 …… 6
　1　東遺跡の地層 …… 6
　2　調査区の設定と調査方法 …… 7
　3　調査の概要 …… 8
第４章　ま と め …… 28
付　編　東遺跡出土石器の石材について …… 33

挿図目次

第１図　遺跡の位置
第２図　周辺の遺跡分布(1/25,000)
第３図　基本層序
第４図　トレンチ位置（1/1,500）
第５図　T-1断面（1/80）
第６図　T-2平・断面（1/80）
第７図　T-3断面（1/80）
第８図　T-4断面（1/80）
第９図　T-5断面（1/80）
第10図　T-6断面（1/80）
第11図　T-7断面（1/80）
第12図　T-8断面（1/80）
第13図　T-9断面（1/80）
第14図　T-10断面（1/80）
第15図　T-11断面（1/80）
第16図　T-12断面（1/80）
第17図　T-13石器分布・断面（1/80)と出土遺物（2/3）
第18図　T-14断面（1/80）
第19図　T-15石器分布・断面（1/80)と出土遺物（2/3・1/3）
第20図　T-16断面（1/80）
第21図　T-17平・断面（1/80）
第22図　T-17石器分布（1/80）
第23図　T-17出土遺物①（2/3）
第24図　T-17出土遺物②（2/3・1/3）
第25図　T-18石器分布・断面（1/80)と出土遺物（2/3・1/3）
第26図　T-19石器分布・断面（1/80)と出土遺物（2/3・1/3）
第27図　T-20断面（1/80）
第28図　T-21石器分布・断面（1/80)と出土遺物（2/3）
第29図　T-22石器分布・断面（1/80)と出土遺物（2/3）
第30図　T-23石器分布・断面（1/80)と出土遺物（2/3）
第31図　T-24石器分布・断面（1/80）
第32図　T-24出土遺物①（2/3）
第33図　T-24出土遺物②（2/3）
第34図　T-24出土遺物③（2/3）
第35図　T-25石器分布・断面（1/80)と出土遺物（1/3）
第36図　T-26断面（1/80）
第37図　T-27石器分布・断面（1/80)と出土遺物（2/3）
第38図　石器・礫の分布域（1/250）
第39図　遺跡の推定範囲（1/2,000）

図版目次

巻頭図版
尖頭器石器群の石器
細石刃石器群の石器
図版1
1．遺跡遠景①
2．遺跡遠景②
3．T-17（拡張部分）
図版2
1．T-19
2．T-22調査風景
3．T-24（拡張部分）
図版3
1．T-17落し穴状土壙
2．T-17細石核
3．T-19尖頭器
4．T-24加工痕のある剝片
5．T-27局部磨製の石器
図版4
1．T-1
2．T-2
3．T-3
4．T-4
5．T-5
6．T-6
7．T-7
8．T-8
図版5
1．T-9
2．T-10
3．T-11
4．T-12
5．T-13
6．T-14
7．T-15
8．T-16
図版6
1．T-17
2．T-18
3．T-20
4．T-23
5．T-24
6．T-25
7．T-26
8．T-27
図版7
1．細石刃・細石核（表）
2．細石刃・細石核（裏）
3．尖頭器①（表）
4．尖頭器①（裏）
5．尖頭器②（表）
6．尖頭器②（裏）
7．スクレイパー（表）
8．スクレイパー（裏）
図版8
1．加工痕・使用痕のある剝片（表）
2．加工痕・使用痕のある剝片（裏）
3．石核（表）
4．石核（裏）
5．局部磨製の石器（表）
6．局部磨製の石器（裏）
7．土器①
8．土器②

表 目 次

第1表　T-13石器組成
第2表　T-15石器組成
第3表　T-17石器組成
第4表　T-18石器組成
第5表　T-19石器組成
第6表　T-21石器組成
第7表　T-22石器組成
第8表　T-23石器組成
第9表　T-24石器組成
第10表　T-25石器組成
第11表　T-27石器組成
第12表　トレンチ調査概要一覧
第13表　各分布域の石器組成
第14表　石器観察表

第１章　調査および報告書作成の経緯と体制

１　調査にいたる経緯

八束村・川上村一帯の蒜山高原には、蒜山原層と呼ばれる湖成層が分布する。中部更新統である蒜山原層下部は層厚約60mにわたり、おもに珪藻土層からなる。珪藻土とは、単細胞藻類である珪藻の遺骸が化石化して出来た土である。八束村では、昭和5年に珪藻土の採掘が本格的に開始され、現在は昭和化学工業株式会社により採掘、加工および製品の出荷がおこなわれている。平成11年に八束村大字下長田に新たな採掘地が選定されたことに伴い、蒜山教育事務組合教育委員会と昭和化学工業株式会社との間で、採掘予定地内に所在する、周知の埋蔵文化財包蔵地である東遺跡の取り扱いについて協議がおこなわれた。協議の結果、遺跡保存に向けての協議資料を得るために確認調査を実施することとなった。これを受けて、蒜山教育事務組合教育委員会では、遺跡の範囲や規模等の把握を目的とし、平成13年度国庫補助事業として、確認調査を実施することとした。

２　調査および報告書作成の体制

確認調査は、平成13年6月18日から12月3日にかけて蒜山教育事務組合教育委員会が実施した。調査期間中、川上小学校の児童と保護者が遺跡見学に訪れるなど多くの見学者を得た。出土遺物の整理作業は平成13年12月から平成14年3月にかけて蒜山教育事務組合教育委員会内において実施した。出土遺物の大半を占める石器の器種および石材の分類に関しては、白石純氏と津村宏臣氏に多大なご協力をいただいた。

報告書の作成は、平成14年度国庫補助を受けて、調査担当者がおこなった。

平成13年度確認調査の体制

蒜山教育事務組合教育委員会
　教育長　小谷　哲夫
　総務課
　　課　　長　樋口　正三
　　主　　査　大美　昌司
　教育課
　　課　　長　前田　公雄
　　課長補佐　常守　由美
　　主　　事　新谷　俊典（調査担当）

平成14年度報告書作成の体制

蒜山教育事務組合教育委員会
　教育長　小谷　哲夫
　総務課
　　課　　長　樋口　正三
　　主　　任　入沢　真士
　教育課
　　課　　長　福井　紀和
　　課長補佐　常守　由美
　　主　　事　新谷　俊典（報告書作成担当）

発掘調査参加者

入澤　隆美、石原　　薫、大美　　明
進　　和彦、高柴　房之、野川　英夫
美甘　隆夫、吉岡　勝巳、吉岡　公明

整理作業協力者

栗原　桂子、筒井　知美

発掘調査参加者

日 誌 抄

平成13年 6 月18日　T-1・2 調査開始
6 月20日　T-3 調査開始
6 月21日　T-4 調査開始
6 月22日　T-5・6 調査開始
6 月27日　T-7・8 調査開始
6 月29日　T-9 調査開始
7 月 2 日　T-10 調査開始
7 月 3 日　T-11 調査開始
7 月 4 日　T-12 調査開始
7 月 9 日　T-13 調査開始
7 月16日　T-14 調査開始
7 月18日　T-15・16 調査開始
7 月24日　T-17 調査開始
8 月20日　T-18 調査開始
9 月 5 日　T-19 調査開始
9 月12日　T-20・21 調査開始
9 月20日　T-22 調査開始
9 月26日　T-23・24 調査開始
9 月27日　T-20 調査終了
10月23日　T-1 調査終了
10月24日　T-2 調査終了
10月31日　T-7・8 調査終了
11月 1 日　T-3・4・5・6・11 調査終了
11月 5 日　T-12・13・14 調査終了
11月 7 日　T-16 調査終了
11月 8 日　T-10・21・22 調査終了
11月 9 日　T-9・19 調査終了
11月12日　T-17・18・23 調査終了
T-25 調査開始
11月19日　T-26 調査開始
11月20日　T-27 調査開始
11月21日　T-25・26・27 調査終了
11月30日　T-24 調査終了
12月 3 日　機材搬出

第2章　遺跡の位置と環境

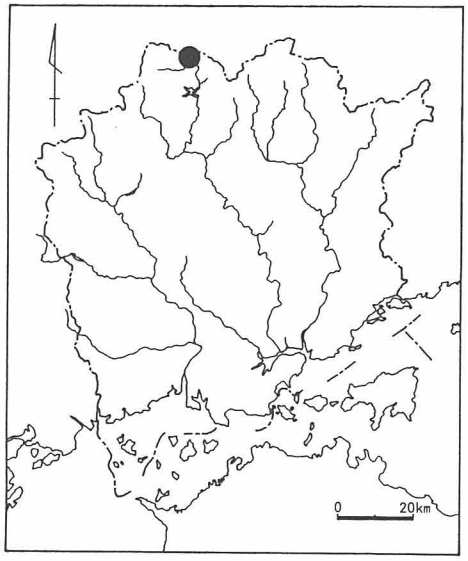
東遺跡は、岡山県真庭郡八束村大字下長田に所在する。岡山県の北端に位置し、北に3km進めば、鳥取県関金町との県境犬挟峠に達する。蒜山火山群と中国山地の間に挟まれた蒜山高原のやや東寄りに位置し、標高は430m前後である。蒜山高原という名称で広く知られるが、地形分類上は、下蒜山・中蒜山・上蒜山・皆ヶ山・擬宝珠山といった標高1,100m～1,200mの山々が連なる蒜山火山群と南側の中国山地の間に広がる東西約20km、南北８kmの細長い盆地である。高原内の地形は、蒜山火山群の裾野に広がる蒜山原と呼ばれる河岸段丘[1]あるいは崖錐性扇状地[2]と、旭川によって形成された沖積低地、そして中国山地の北麓に広がる段丘に大別される。かつてこの高原は古蒜山湖と呼ばれる湖であり、湖に繁殖した珪藻の遺骸は珪藻土となって湖底に沈積した。この珪藻土を中心とした湖成層は蒜山原層と呼ばれ、高原内に厚さ100m以上にわたり堆積している。

蒜山高原は、現在の行政区画では西から川上村、八束村、中和村にあたる。平野やなだらかな丘陵が多く、山間地域としては林野が少ない。気温は県南部に比較して年平均4.7度低く、降水量は年間2,000㎜を超え、県南部の２倍近い。夏は冷涼であるが、冬は降雪が著しく、沖積低地でも積雪量が１mを超える年もある。

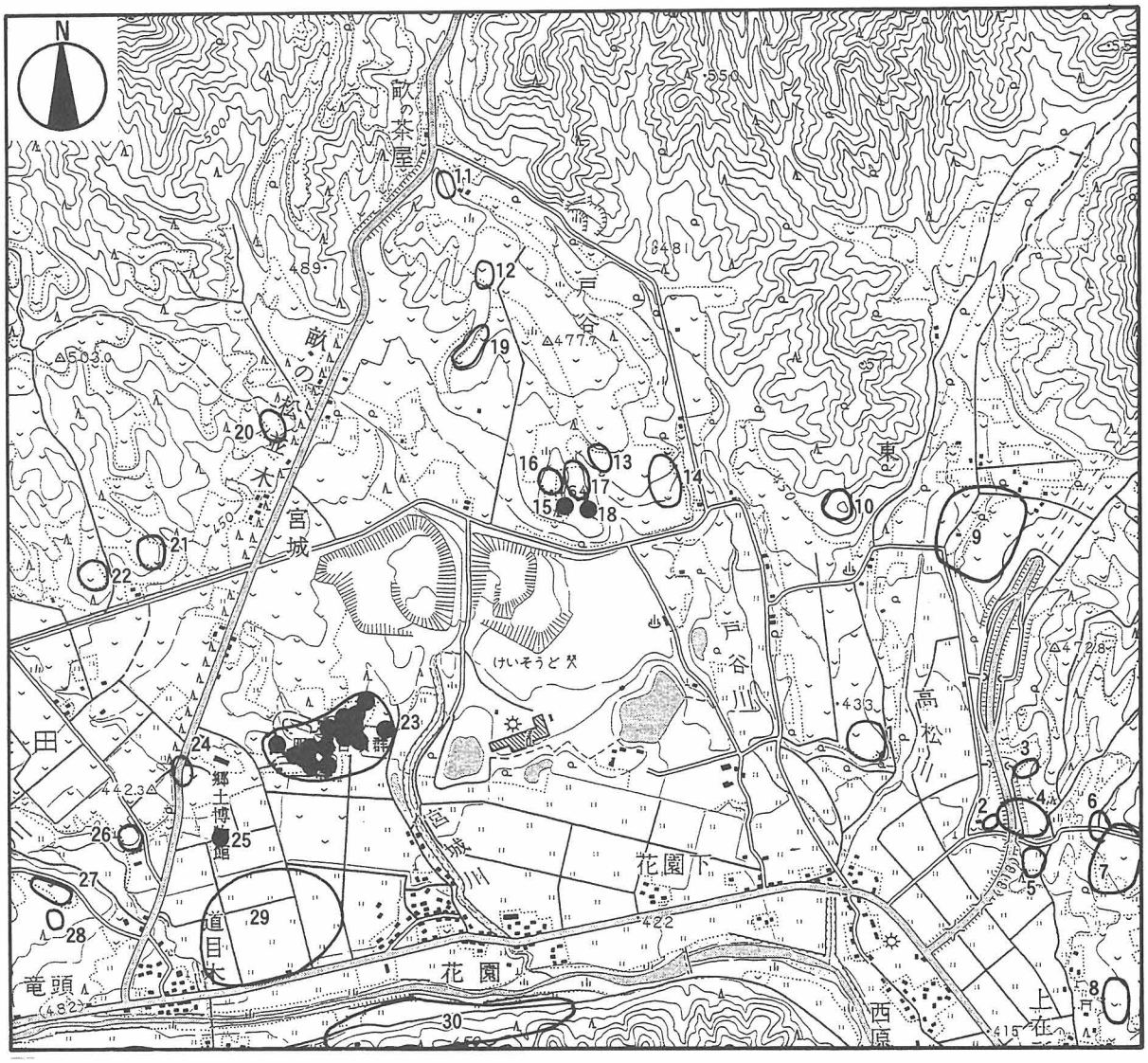
蒜山高原のうち川上村、八束村では、現在のところ300カ所以上の遺跡が確認されている。なかでも旧石器時代の遺跡は、鍵層となる姶良丹沢火山灰層をはじめとする厚く堆積した火山灰層中に良好な状態で残されていることから、中国地方の旧石器時代研究の上でも重要な位置を占める。これは、1980年代以降の鎌木義昌氏や小林博昭氏が実施した発掘調査、白石純氏による遺跡分布調査など岡山理科大学による継続的な研究活動の成果に負うところが大きい。

約24,000年から26,000年前に噴出起源をもつとされる姶良丹沢火山灰層の下位から石器群を検出した遺跡は、川上村の中山西遺跡[3]、城山東遺跡[4]、下郷原田代遺跡No.２地点[5]、八束村の戸谷遺跡第１地点・第４地点・第５地点[6]、上野遺跡[7]の７遺跡である。これらの遺跡で検出された石器群はナイフ形石器や台形様石器を主体とし、石材には黒曜石・安山岩・石英・水晶などが利用される。中山西遺跡では石器や炭化物が径14.5mの範囲に環状に分布し、注目される。

姶良丹沢火山灰層の上位から石器群を検出した遺跡は、八束村の笹畝遺跡第1地点[8]・同2地点[9]、竜頭遺跡[10]、牧野遺跡第５地点[11]、戸谷遺跡第1地点、そして東遺跡[12]の６遺跡である。検出された石器群は、



第１図　遺跡の位置



1．東遺跡
2．上野中遺跡第1地点
3．上野中遺跡第2地点
4．上野古墳群・上野遺跡
5．上野B遺跡
6．湯頭B遺跡
7．湯頭遺跡
8．上在所遺跡
9．東下遺跡
10．上野中遺跡
11．戸谷遺跡第1地点
12．戸谷遺跡第2地点
13．戸谷遺跡第4・第5地点
14．戸谷遺跡第6地点
15．牧野遺跡第1地点
16．牧野遺跡第2地点
17．牧野遺跡第3地点
18．牧野遺跡第4地点
19．牧野遺跡第5地点
20．笹畝遺跡第1地点
21．笹畝遺跡第2地点
22．笹畝遺跡第3地点
23．四つ塚古墳群
24．中野遺跡
25．一つ塚古墳
26．道目木遺跡
27．竜頭遺跡
28．道目木B遺跡
29．道目木散布地
30．中津加茂遺跡

第2図　周辺の遺跡分布（国土地理院2万5千分の1地形図「蒜山」に加筆）

ナイフ形石器・角錐状石器・尖頭器・細石刃など主体となる器種が遺跡により異なる。石材には黒曜石・安山岩・頁岩などが利用される。

上述の遺跡に採集資料などから旧石器時代に帰属すると考えられる遺跡を合わせると、八束村、川上村では30カ所の旧石器時代遺跡が確認されている。遺跡の多くは、蒜山高原と各地を結ぶ移動ルート沿いに立地し、この高原が旧石器人の移動ルートの中で重要な役割を担ったことを示唆する。

東遺跡の立地する低位丘陵も、高原の地形が東西から南北へ方向を変える地点に位置し、西側、

南側の低地を広く見渡せることができるため、当時の人々の滞在地として、すぐれた条件を備えていたと思われる。

縄文時代については、分布調査などに伴う採集資料により、多くの遺跡が確認されている。また近年、発掘調査例も徐々に蓄積されており、中山西遺跡において早期の住居址４軒が検出されたほか、中山西遺跡、城山東遺跡、下郷原田代遺跡、ウエノ山遺跡、上野遺跡では落し穴状土壙が確認されている。

弥生時代については、確認された遺跡数、採集資料の数とも少なくなる。川上村では城山東遺跡、下郷原田代遺跡No.１地点[13]、下郷原和田遺跡[14]の調査がおこなわれ、後期に属する住居址などが検出されている。八束村では中津加茂遺跡などが知られるが、該期の遺跡の調査例はない。

古墳時代については、高原内に150基を超える古墳が確認されている。なかでも近藤義郎氏により調査された四つ塚古墳群[15]は著名である。四つ塚古墳群は高原のやや東寄りに位置する。径10～20mほどの円墳を中心に19基の古墳より構成され、５世紀から６世紀中葉にかけて築造されたと考えられる。埋葬施設が判明しているのは、横穴式石室を有す１号墳と木棺直葬である13号墳の２基のみである。その他、５世紀後半に築造されたと推定される上野古墳群[16]、６世紀後半から７世紀中頃にかけて築造されたと推定される水別古墳群[17]についても発掘調査がおこなわれている。

これに対して、集落遺跡については調査例に乏しく、当時の生活について不明な点が多い。現在確認されている遺跡の立地から、沖積低地に面した段丘上に集落が点在していたことがわずかに想像される。

註

(1) 蒜山原団体研究グループ「岡山県蒜山原の第四系(1)、(2)」『地球科学』29－4,5　1975年
(2) 高橋護「第１章第２節　岡山県北部地域」『岡山県史』原始・古代Ⅰ　岡山県　1991年
(3) 下澤公明「第２章　蒜山地域の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　岡山県教育委員会　1995年
(4) 註(3)に同じ
(5) 註(3)に同じ
(6) 鎌木義昌・小林博昭「戸谷遺跡」『岡山県史』考古資料　岡山県　1986年
(7) 平井勝「下長田上野古墳群・上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』103　岡山県教育委員会　1995年
(8) 鎌木義昌・小林博昭「岡山県北部の火山灰と石器群」『日本考古学協会1987年度大会研究発表要旨』　日本考古学協会　1987年
(9) 小林博昭・白石純「蒜山原笹畝遺跡第2地点発掘調査概報」『自然科学研究所研究報告』23　岡山理科大学自然科学研究所　1998年
(10) 註(8)に同じ
(11) 鎌木義昌・小林博昭「岡山県牧野遺跡第5地点」『日本考古学年報』37　日本考古学協会　1986年
(12) 白石純・小林博昭「蒜山原東遺跡の発掘調査」『自然科学研究所研究報告』27　岡山理科大学自然科学研究所　2001年
(13) 註(3)に同じ
(14) 註(3)に同じ
(15) 近藤義郎編『蒜山原四つ塚古墳群（改訂版）』　八束村　1992年
(16) 註(7)に同じ
(17) 金田善敬「水別古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』131　岡山県教育委員会　1998年

参考文献

日本の地質『中国地方』編集委員会編「中国地方」『日本の地質』7　共立出版株式会社　1987年
光野千春・沼野忠之・高橋達郎『岡山の地学』　山陽新聞社　1982年

第3章　発掘調査の概要

1　東遺跡の地層

東遺跡の所在する低位丘陵は、上部を大山起源の火山灰によって覆われており、調査地内に設定したトレンチの基本的な層序はおおむね共通する。ただし、多くのトレンチでは耕作あるいは造成により上位の地層が一部削平されている。また、一部のトレンチで、ここに記載していない地層が堆積する。そのため、ここでは各層の概要を述べるにとどめ、層番号についてはトレンチごとに付している。なお、各層の概要末尾に岡山理科大学による蒜山原の基本層序[1]を記しておく。

黒色土層（耕作土）

多くのトレンチで、黒色土（黒ボク）の上半部は、耕作土となる。層厚約20～40cm。

黒色土層（黒ボク層）

本来の表土層である漆黒色でしまりがよい黒色土。耕作の及んでいないトレンチでは、表土層が黒色土層となる。この場合、上半部は樹根等による撹乱を受け、しまりのないことが多い。層厚約10～60cm。（蒜山原Ⅰ層）

暗褐色土層（漸移層）

層の境界が不明瞭で、樹根等の影響により下位の明黄褐色風化火山灰が上位の黒色土に汚染されただけの場所もある。層厚約10～30cm。（蒜山原Ⅱ層）

明黄褐色風化火山灰層（ソフトローム層）

層厚約10～45cm。（蒜山原Ⅲ層）

黄褐色軽石層

上部が黄褐色細粒、下部が明黄橙褐色中粒となる。弥山軽石に相当する。層厚約40～65cm。（蒜山原Ⅳ層）

硬質青灰色火山砂層

上のホーキ火山砂に相当する。層厚約10～40cm。（蒜山原Ⅴ層）

淡褐色火山砂層

上部3～5cmはハードローム質で、暗色帯をなす。オドリ火山砂に相当する。層厚約10～20cm。（暗色帯：蒜山原Ⅵ層、火山砂：蒜山原Ⅶ層）

硬質青灰色火山砂層

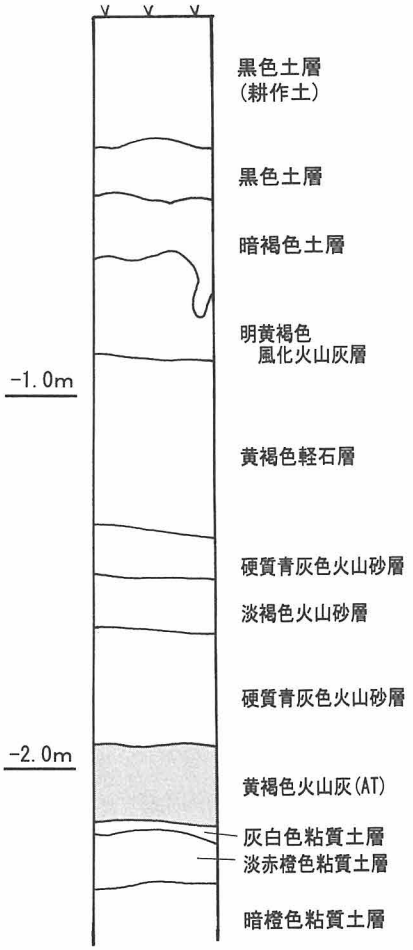
下のホーキ火山砂に相当する。層厚約25～50cm。（蒜山原Ⅷ層）

黄褐色火山灰層

始良丹沢（AT）火山灰に相当する。層厚約10～25cm。（蒜山原Ⅸ層）

灰白色粘質土層

ローム質であり、T-8・T-11・T-17・T-19・T-22で堆積が確認されている。層厚約５cm。



第３図　基本層序

淡赤橙色粘質土層　　火山灰起源の可能性がある。層厚約10～25㎝。（蒜山原Ｘ層）

暗橙色粘質土層　　火山灰起源の可能性がある。層厚約20～30㎝。（蒜山原Ⅺ層）

上述の層序のうち、硬質青灰色火山砂層（下のホーキ火山砂相当）以上が大山上部火山灰に属する。

また、この層序は蒜山高原の旧石器遺跡群にほぼ共通し、高原内では現在までに黒色土層、暗褐色土層、明黄褐色風化火山灰層、淡褐色火山砂層の暗色帯、淡赤橙色粘質土層から石器群が検出されている。

註

(1) 下記の文献に基づく。
鎌木義昌・小林博昭「戸谷遺跡」『岡山県史』考古資料　岡山県　1986年
小林博昭「蒜山原の火山灰と旧石器群」『火山灰と考古学をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会鹿児島研修会実行委員会　1987年

２　調査区の設定と調査方法

調査対象の東遺跡は、真庭郡八束村大字下長田に所在する。戸谷川と高松川に挟まれた標高430ｍ前後の低位丘陵に立地し、蒜山火山群の裾野に広がる丘陵群からやや南に突き出るかたちとなる。丘陵は沖積低地に面し、高松川の現河床との比高は約10ｍである。戦前は軍馬の放牧場などに利用されていたが、戦後大規模な開墾がおこなわれ、水田・畑・牧草地などとして利用されるようになった。現在は地表下約15mより下位に堆積する珪藻土の採掘が、露天掘りによって進行しており、いずれ丘陵面は削平されることになる。

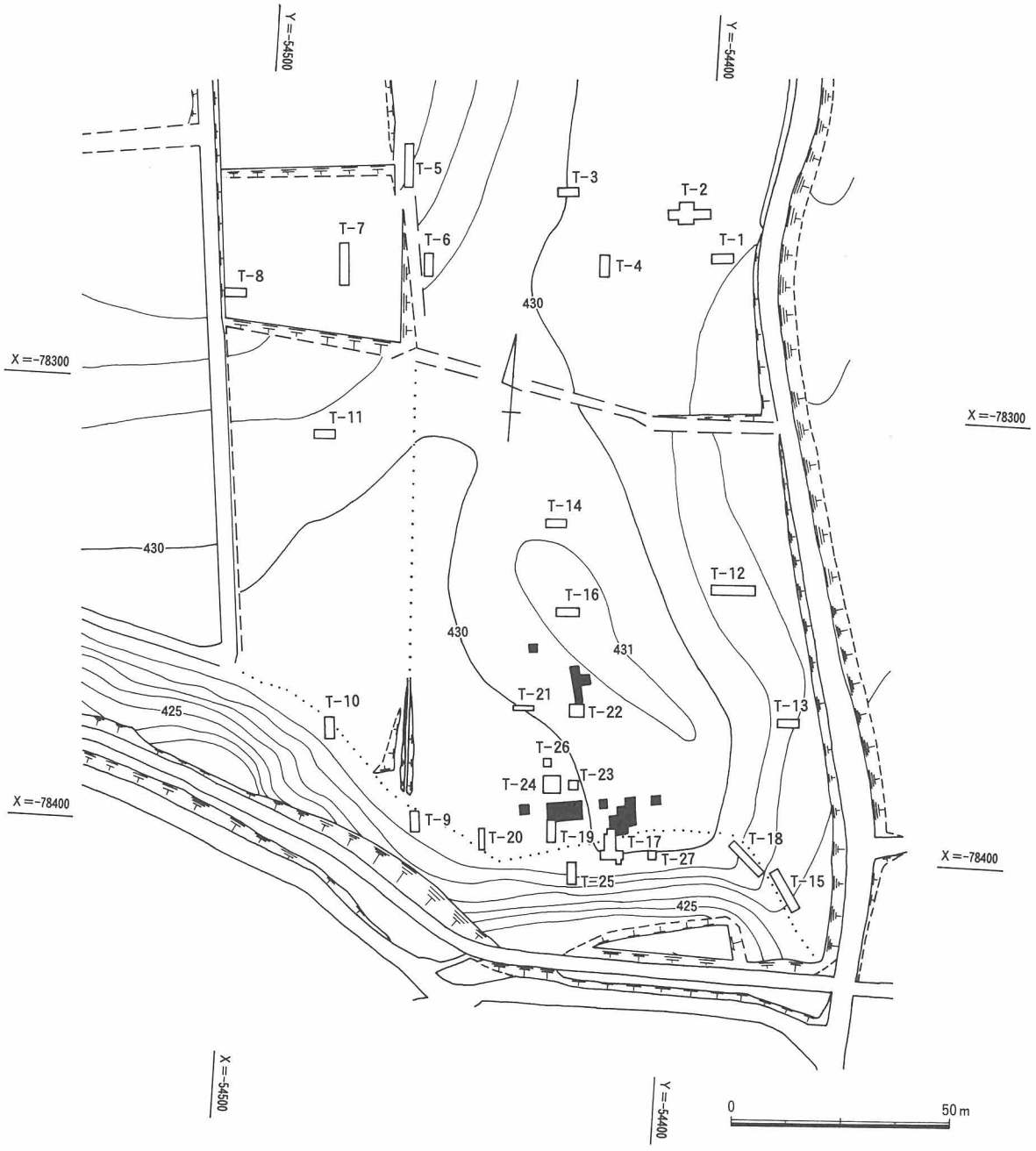
本遺跡は、昭和57(1982)年に白石純氏が細石核を採集したことで発見され(1)、翌年、岡山理科大学と瀬戸内考古学研究所により学術調査が実施された(2)。７本のトレンチを設定して調査がおこなわれ、３本のトレンチで旧石器時代の石器群が検出された。３本のトレンチのうち、東区トレンチでは第Ⅱ層（暗褐色土層）を中心に細石刃を主体とする石器群、西区トレンチでは第Ⅱ層より尖頭器を主体とする石器群、北区トレンチでは第Ⅲ層（明黄褐色風化火山灰層）より尖頭器を主体とする石器群が、それぞれ検出された。この他、縄文土器や弥生時代のピットも検出されており、これらの成果により、本遺跡は旧石器時代から弥生時代の遺跡であることが判明した。

上述の調査によって遺跡の時代や性格がある程度把握されたものの、部分的な調査であったため、遺跡の範囲や規模については不明であった。また、明黄褐色風化火山灰層より上位の石器群の検出を調査目的としていたため、さらに下位の遺物包含層の存否は明らかでなかった。

それらを踏まえて、今回の調査では、遺跡の範囲確認と遺物包含層の把握を主たる目的にトレンチを設定した。トレンチは、岡山県教育委員会が平成６年度に実施した遺跡分布調査(3)により想定された遺跡範囲内に27本設定した。遺物包含層の広がりを確認するため、丘陵南端付近に重点的にトレンチを設けた。調査面積は332㎡である。調査は、明黄褐色風化火山灰層までは人力により掘り下げた。さらに下層については、淡褐色火山砂層上面の暗色帯および淡赤橙色粘質土層は人力で掘り下げ、その他の地層は重機を使用した。調査終了後は重機によって埋め戻した。

註

(1) 白石(堀川)純「岡山県八束村牧野遺跡第5地点及び東遺跡採集の旧石器」『蒜山研究所研究報告』10　岡山理科大学蒜山研究所　1985年
(2) 白石純・小林博昭「蒜山原東遺跡の発掘調査」『自然科学研究所研究報告』27　岡山理科大学自然科学研究所　2001年
(3) 分布調査の成果は、『改訂　岡山県遺跡地図』（岡山県教育委員会　2002年度刊行予定）に収載予定である。



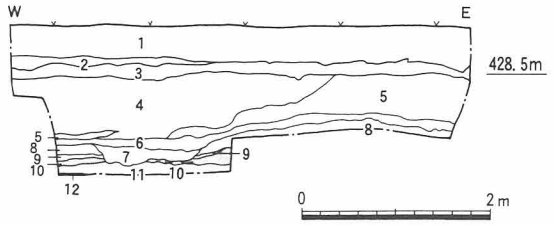
第４図　トレンチ位置（1／1,500）
（黒塗りは1983年調査トレンチ）

3　調 査 の 概 要

T-1～T-6（第５図～第10図、図版４）

調査地の北部に、南北軸もしくは東西軸で設定した。遺構の確認されなかったT-1・T-3～T-6については、地層のみ掲載する。いずれのトレンチも遺物の出土はない。

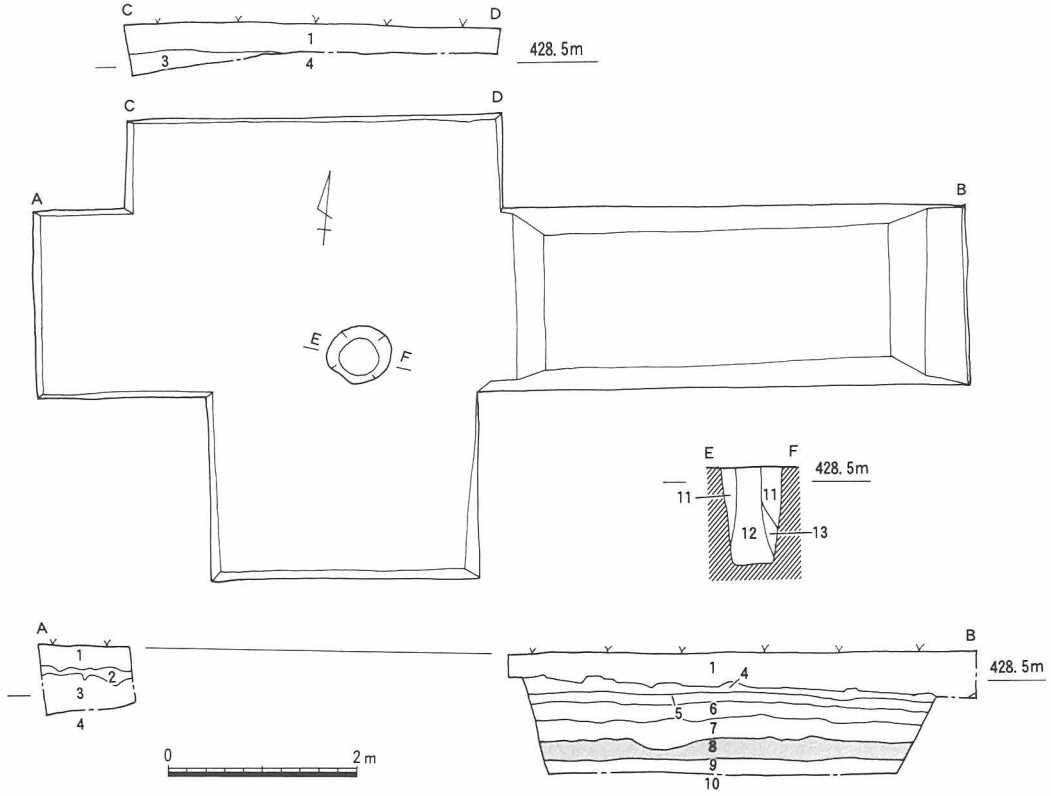
T-1の現地表高は約428.9mである。地層は北西に向け緩やかに傾斜する。４層は５層の細粒部分にちかいが、しまりがなく砂質となる。８層は９層にちかいが、上下の地層との境が不明瞭であり、下面に鉄分の沈着が目立つ。平面で確認できなかったが、自然流路が存在した可能性が考えられる。



１．黒色土（現耕作土）
２．暗褐色土
３．明黄褐色風化火山灰
４．黄橙色砂質土
５．黄褐色軽石
６．硬質青灰色火山砂
７．淡褐色火山砂
８．暗オリーブ褐色火山砂
９．硬質青灰色火山砂
10．黄褐色火山灰（AT）
11．淡赤橙色粘質土
12．暗橙色粘質土

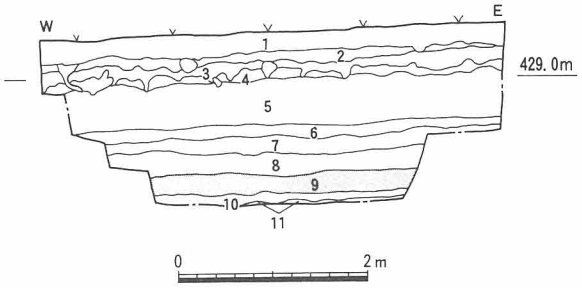
第５図　T-１断面（1／80）

T-2の現地表高は約428.9mである。トレンチ西部に残る４層上面は西に向け緩やかに傾斜する。４層より下位の地層は水平に堆積する。１層を除去した時点でピットを１基検出した。耕作により掘り込み面は削平されており、検出面は３層である。直径70cmの円形を呈し、深さは検出面から104cmである。埋土は黒色土を主体とし、柱痕跡が観察できる。遺物の出土はないため、時期・性格については不明である。他に遺構が存在する可能性を考慮し、周辺を南北に拡張したが、遺構・遺物とも確認されなかった。



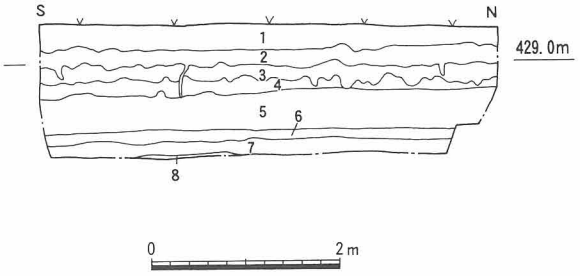
１．黒色土（現耕作土）
２．暗褐色土
３．明黄褐色風化火山灰
４．黄褐色軽石
５．硬質青灰色火山砂
６．淡褐色火山砂
７．硬質青灰色火山砂
８．黄褐色火山灰（AT）
９．淡赤橙色粘質土
10．暗橙色粘質土
11．暗褐色土（礫混）
12．黒色土
13．黒色土

第６図　T-２平・断面（1／80）



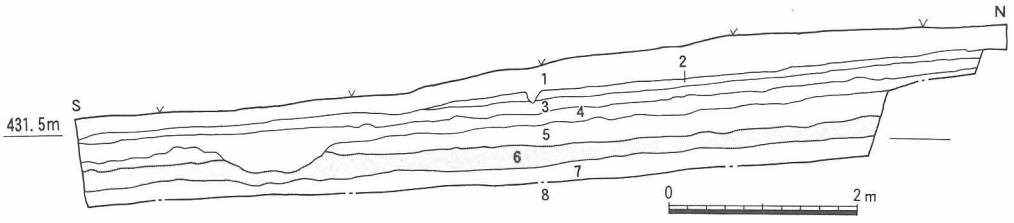
1．黒色土（現耕作土）　7．淡褐色火山砂
2．黒色土　8．硬質青灰色火山砂
3．暗褐色土　9．黄褐色火山灰（AT）
4．明黄褐色風化火山灰　10．淡赤橙色粘質土
5．黄褐色軽石　11．暗橙色粘質土
6．硬質青灰色火山砂

第７図　T-3 断面（1／80）



1．黒色土（現耕作土）　5．黄褐色軽石
2．黒色土　6．硬質青灰色火山砂
3．暗褐色土　7．淡褐色火山砂
4．明黄褐色風化火山灰　8．硬質青灰色火山砂

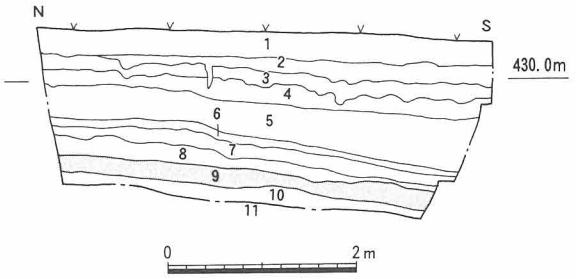
第８図　T-4 断面（1／80）



1．黒色土（現耕作土）　4．淡褐色火山砂　7．淡赤橙色粘質土
2．黄褐色軽石　5．硬質青灰色火山砂　8．暗橙色粘質土
3．硬質青灰色火山砂　6．黄褐色火山灰（AT）

第９図　T-5 断面（1／80）

T-3の現地表高は約429.5mである。地層はほぼ水平に堆積する。10層上面には鉄分の沈着が目立つ。T-4の現地表高は約429.4mである。地層は南西に向け緩やかに傾斜する。T-5の現地表高は北側で約432.7m、南側で431.6mである。現地表面同様、地層は高所となる北西側から南東に向け緩やかに傾斜する。T-6の現地表高は約430.5mである。地層は東側に向けやや急に、南側に向け緩やかに傾斜する。西側の高所から南東に下る傾斜部分と判断できる。

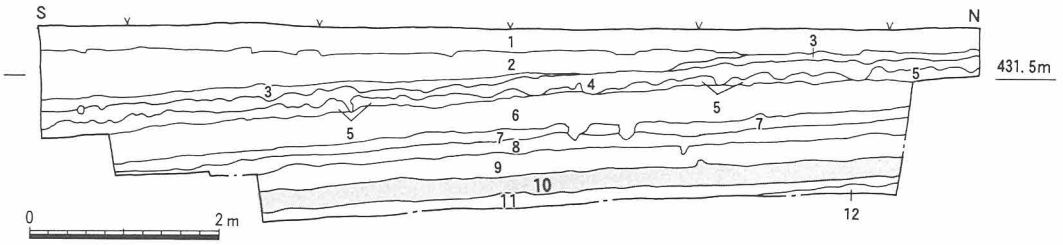


1．黒色土（現耕作土）　7．淡褐色火山砂
2．黒色土　8．硬質青灰色火山砂
3．暗褐色土　9．黄褐色火山灰（AT）
4．明黄褐色風化火山灰　10．淡赤橙色粘質土
5．黄褐色軽石　11．暗橙色粘質土
6．硬質青灰色火山砂

第10図　T-6 断面（1／80）

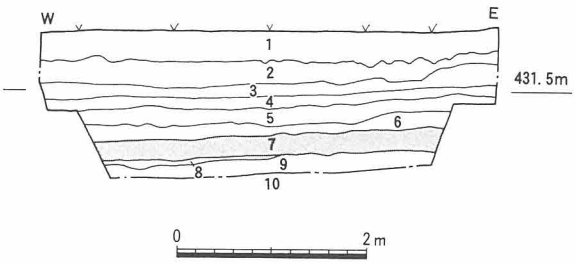
T-7・T-8（第11・12図、図版４）

調査地北西部に位置する南東側より高位にある平坦面に、南北軸もしくは東西軸で設定した。遺構は確認されなかったため、地層のみ掲載する。遺物の出土はない。両トレンチとも耕作土下に、造成土が認められる。T-7の現地表高は約432.0mである。造成土下の地層は南に向け緩やかに傾斜する。T-8の現地表高は約432.1mである。地層はほぼ水平に堆積し、トレンチ西側では７層下に８層が５cmほど堆積する。



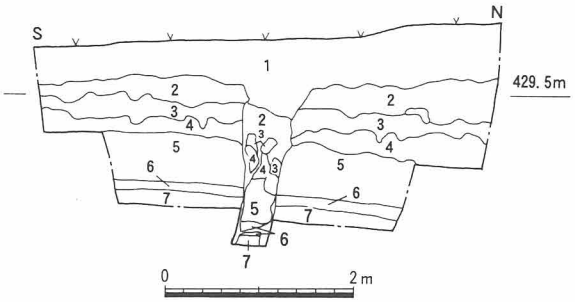
1．黒色土（現耕作土）　4．暗褐色土　7．硬質青灰色火山砂　10．黄褐色火山灰（AT）
2．黒色土（造成土）　5．明黄褐色風化火山灰　8．淡褐色火山砂　11．淡赤橙色粘質土
3．黒色土　6．黄褐色軽石　9．硬質青灰色火山砂　12．暗橙色粘質土

第11図　T-7 断面（1／80）



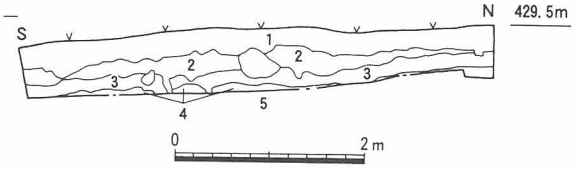
1．黒色土（現耕作土）　6．硬質青灰色火山砂
2．黒色土（造成土）　7．黄褐色火山灰（AT）
3．黄褐色軽石　8．灰白色粘質土
4．硬質青灰色火山砂　9．淡赤橙色粘質土
5．淡褐色火山砂　10．暗橙色粘質土

第12図　T-8 断面（1／80）



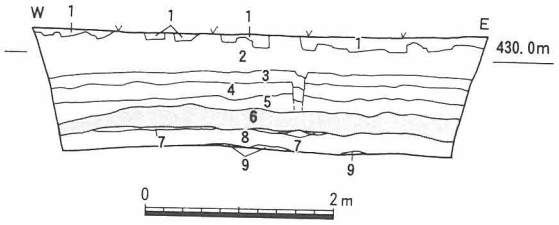
1．黒色土（造成土）　5．黄褐色軽石
2．黒色土　6．硬質青灰色火山砂
3．暗褐色土　7．淡褐色火山砂
4．明黄褐色風化火山灰

第14図　T-10 断面（1／80）



1．黒色土（現耕作土）
2．黒色土
3．暗褐色土
4．明黄褐色風化火山灰
5．黄褐色軽石

第13図　T-9 断面（1／80）



1．黒色土（現耕作土）　6．黄褐色火山灰（AT）
2．黄褐色軽石　7．灰白色粘質土
3．硬質青灰色火山砂　8．淡赤橙色粘質土
4．淡褐色火山砂　9．暗橙色粘質土
5．硬質青灰色火山砂

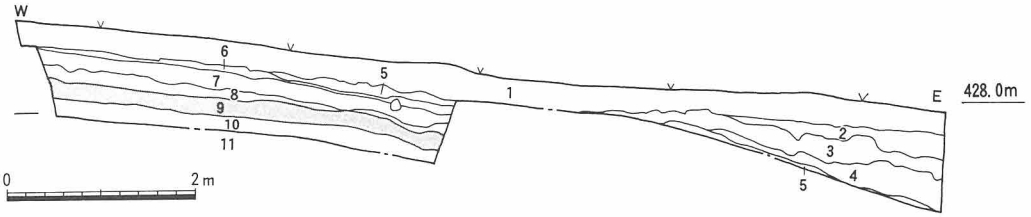
第15図　T-11 断面（1／80）

T-9～T-11（第13～15図、図版５）

調査地西部に、南北軸もしくは東西軸で設定した。遺構は確認されなかったため、地層のみ掲載する。いずれのトレンチも遺物の出土はない。

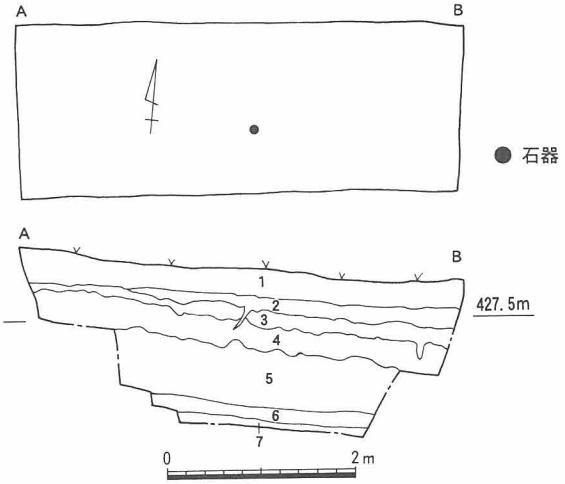
T-9の現地表高は約429.3mである。地層は南に向けやや傾斜し、４層の堆積はわずかである。T-10の現地表高は約430.1mである。トレンチ中央に幅50cmの地割れが東西方向に走る。土層は北に向け緩やかに傾斜する。T-11の現地表高は約430.2mである。地層はほぼ水平に堆積する。６層下に７層が５cmほど堆積する。

上述の調査結果に基づき、当初想定した遺跡範囲の北半部および西部については埋蔵文化財包蔵地外であると判断した。



1．黒色土（現耕作土）　4．明黄褐色風化火山灰　7．淡褐色火山砂　10．淡赤橙色粘質土
2．黒色土　5．黄褐色軽石　8．硬質青灰色火山砂　11．暗橙色粘質土
3．暗褐色土　6．硬質青灰色火山砂　9．黄褐色火山灰（AT）

第16図　T-12 断面（1／80）

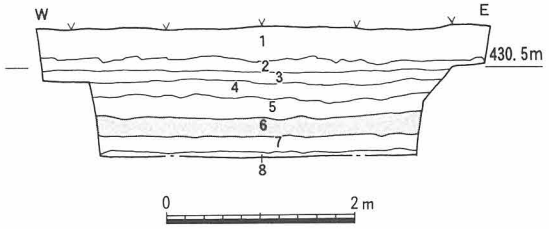


1．黒色土（現耕作土）
2．黒色土
3．暗褐色土
4．明黄褐色風化火山灰
5．黄褐色軽石
6．硬質青灰色火山砂
7．淡褐色火山砂

第17図　T-13 石器分布・断面（1／80）と出土遺物（2／3）

	黒曜石	合　計
細石刃	1	1
合　計	1	1

第１表　T-13 石器組成



1．黒色土（現耕作土）　5．硬質青灰色火山砂
2．黄褐色軽石　6．黄褐色火山灰（AT）
3．硬質青灰色火山砂　7．淡赤橙色粘質土
4．淡褐色火山砂　8．暗橙色粘質土

第18図　T-14 断面（1／80）

T-12（第16図、図版５）

T-12は調査地東部に東西方向で設定した。現地表高はトレンチ西側で約429.0m、東側で約427.8mである。遺構は確認されなかったため、地層のみ掲載する。地層は東に向け傾斜する。西側の高所から東側の谷部に向けて下る斜面に位置するため、東側ほど４層の堆積が厚くなる。遺物の出土はない。

T-13（第17図、図版5、7・第１表）

T-13は調査地東部に東西方向で設定した。現地表高は約428.2mである。地層は東に向け傾斜する。T-12同様、東側ほど地層の堆積が厚くなる。

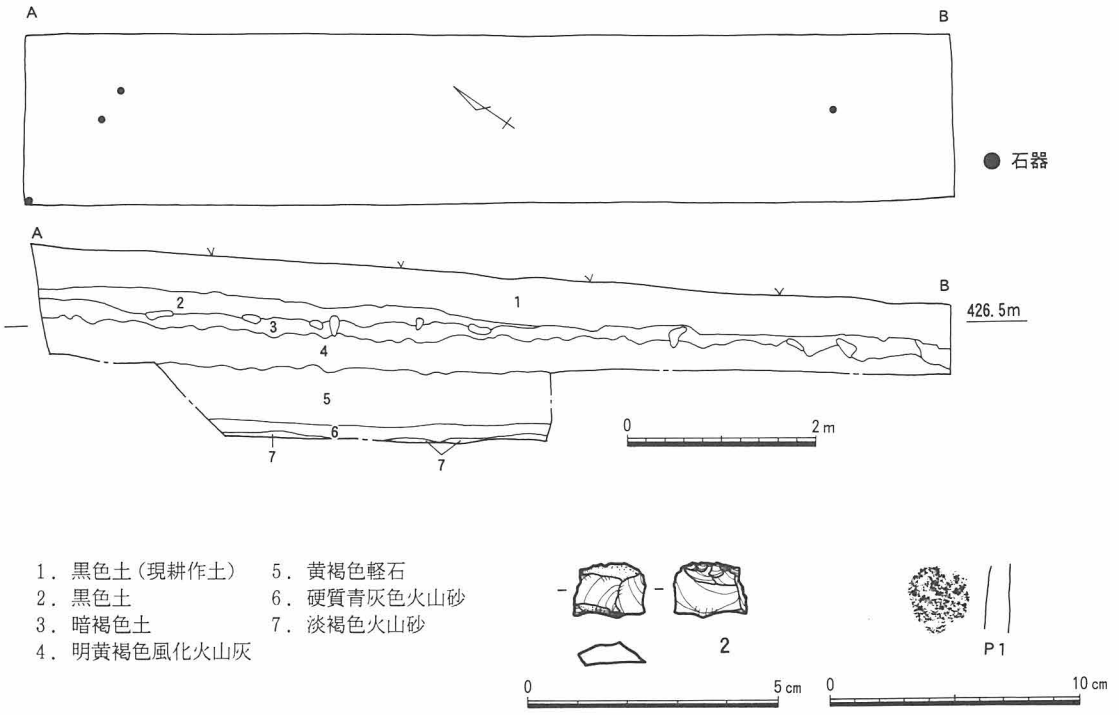
出土遺物　遺物は２層下部から石器が１点出土した。１は黒曜石製細石刃である。背面には同一方向からの剥離面が残る。左側縁に微細な剥離痕がみられる。

T-14（第18図、図版５）

T-14は調査地中央部やや北寄りに東西方向で設定した。現地表高は約430.9mである。遺構は確認されなかったため、地層のみ掲載する。地層はほぼ水平に堆積する。遺物の出土はない。

T-15（第19図、図版５・８、第２表）

T-15は、調査地南東部の南東方向へ下る斜面に設定した。現地表高はトレンチ北西側で約



第19図　T-15 石器分布・断面（1／80）と出土遺物（2／3・1／3）

427.6m、南東側で約426.7mである。地層は南東に向けやや傾斜し、４・５層の堆積が厚い。遺構は確認されていない。

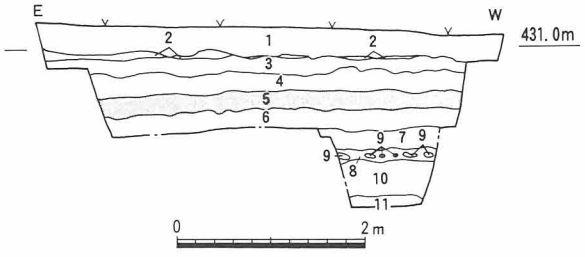
出土遺物　遺物は２層から石器、縄文土器が出土した。石器は北東部分を中心に４点出土した。石材はすべて黒曜石である。**2** は黒曜石製加工痕のある剥片であり、主剥離面のバルブ部分に調整を施す。**P１** は縄文土器であり、外面に縄文を施す。胎土に繊維を少量含む。

	黒曜石	合　計
加工痕のある剥片	1	1
剥片	3	3
合　計	4	4

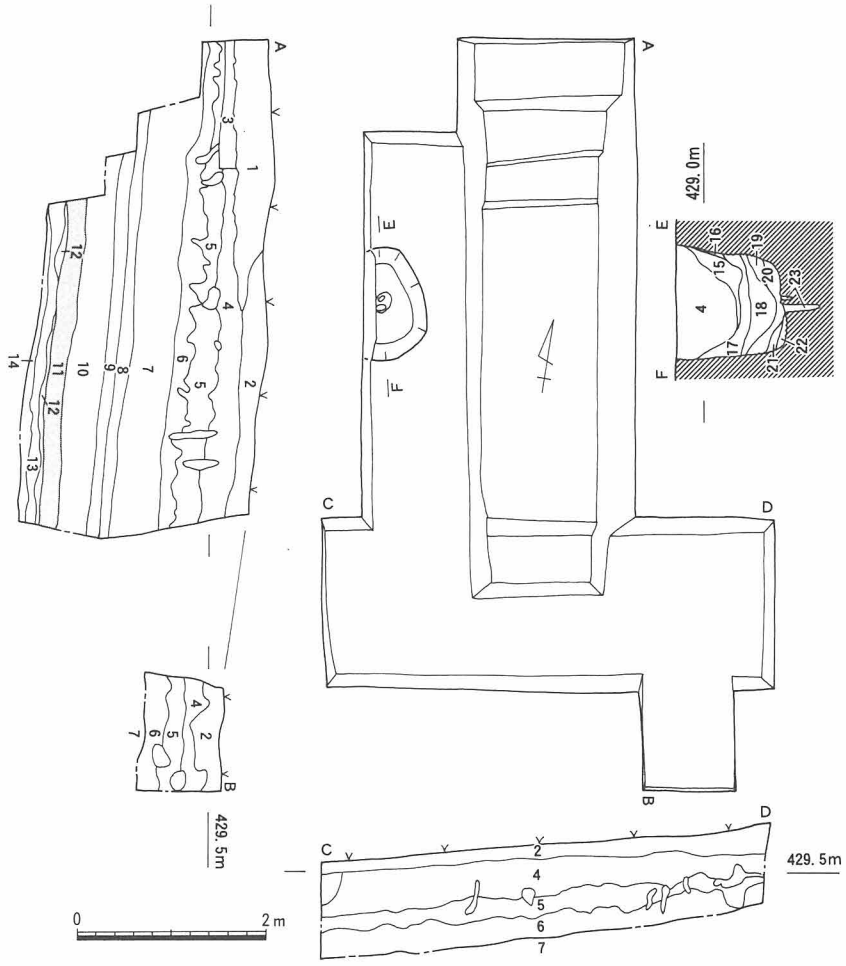
第２表　T-15 石器組成

T-16（第20図、図版5）

T-16は調査地中央部に東西方向で設定した。現地表高は約431.1mである。遺構は確認されなかったため、地層のみ掲載する。地層はほぼ水平に堆積する。このトレンチでは、７層より下位の地層を対象に深掘りをおこなった。７層の下位には、粘質土層が堆積する。９層は、８層内にブロック状に堆積する。緑灰色を呈す火山砂であり、偽ホーキ層に相当する可能性がある。遺物の出土はない。



第20図　T-16 断面（1／80）



第21図　T-17 平・断面（1／80）

T-17（第21～24図、図版１・３・６～８、第３表）

T-17は調査地南部に設定し、現地表高は約429.8mである。このトレンチでは前回調査地点の確認を目的の１つとしたが、当初設定した東西軸２×５mの範囲では確認できなかった。それを踏まえ、トレンチを北側に広げた結果、拡張部分北東部で前回調査東区トレンチを確認した。またトレンチ南東部で５層下部より石器が出土したため、６層中に未確認の石器群が存在する可能性を考慮し、南側にも拡張している。総面積は25㎡となる。

黒色土から暗橙色粘質土にわたる基本層序がすべて確認され、地層は南西に向け緩やかに傾斜する。トレンチ南側は耕作が及んでいないため、表土層はしまりのない黒色土となる。

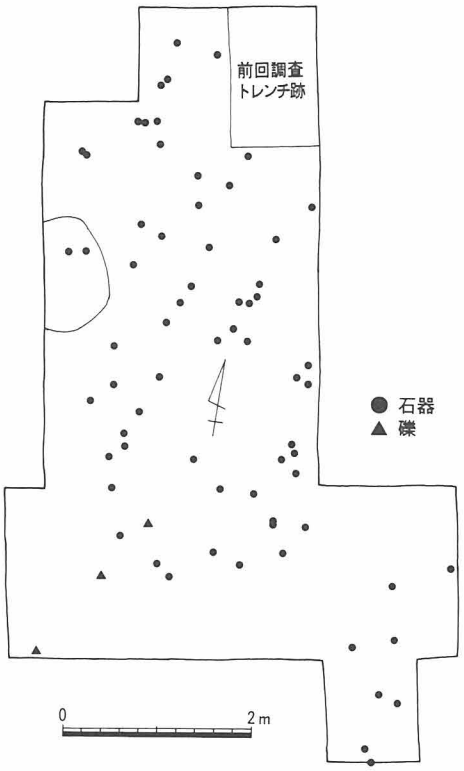
遺構は落し穴状土壙を1基検出した。検出面は５層上面である。土壙は４層から掘り込まれたと思われるが、トレンチ西壁でも掘り込み面は確認できなかった。土壙は楕円形を呈し、長軸幅244cm、検出面からの深さ118cmを測る。底面に小穴を２つ有し、それぞれ深さ40cm、16cmを測る。小穴周辺の底面は若干隆起する。埋土は黒色土を主体とし、明黄褐色風化火山灰や黄褐色軽石がブロック状に混じる。遺物は、４層から細石刃⑶を含む石器２点が出土した。埋土上位からの出土であり、周辺から土壙内に流入した可能性が高い。

出土遺物　遺物は、４層から６層にかけて石器、縄文土器および礫が出土した。

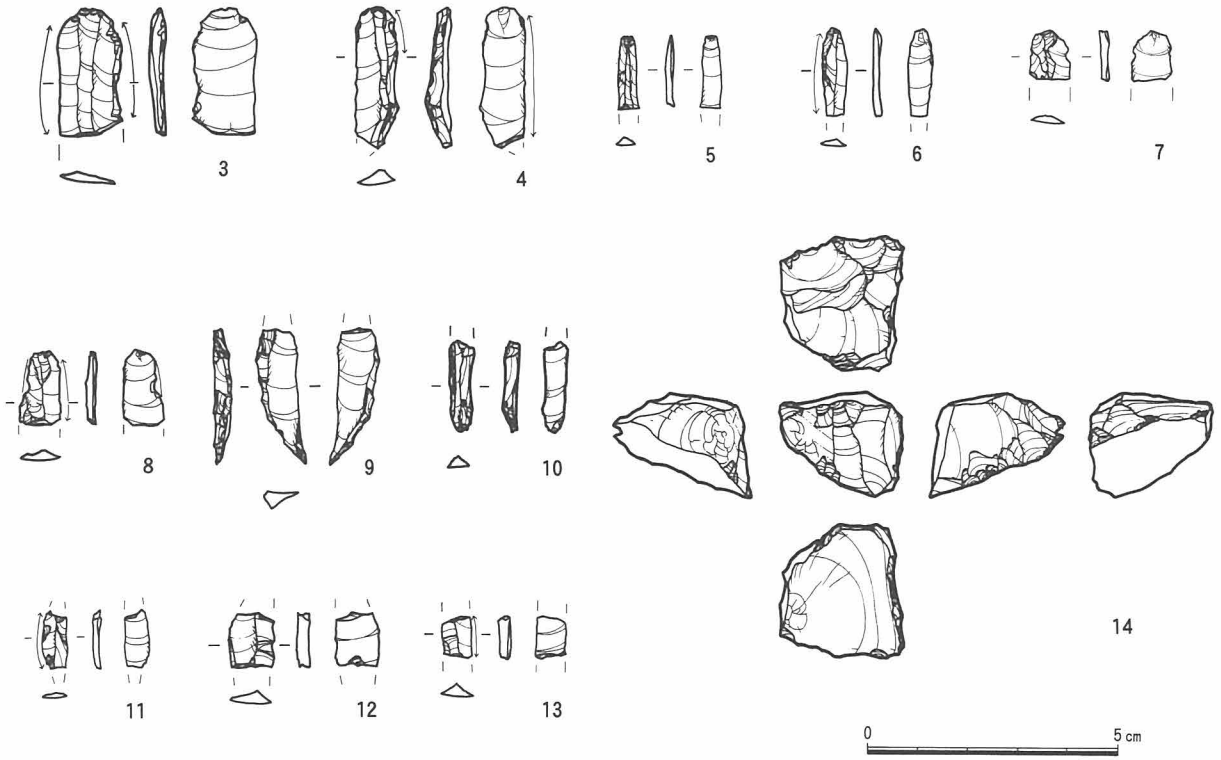
石器は４層下部から５層を中心に出土した。落し穴状土壙内出土の２点を含め、出土点数は69点である。石器の分布は、集中することなくトレンチ全体に広がるが、トレンチ南西部には石器が分布しない。石材は、黒曜石32点・安山岩16点・頁岩13点・三群変成岩８点であり、黒曜石が半数近くを占める。

	黒曜石	安山岩	頁　岩	三群変成岩	合　計
細石刃	11				11
細石核	1				1
スクレイパー					
加工痕のある剝片	4	1			5
使用痕のある剝片					
石核	1	1	3	2	7
剝片	13	12	10		35
砕片	2	2		6	10
合　計	32	16	13	8	69

第３表　T-17 石器組成



第22図　T-17 石器分布（1／80）



第23図　T-17 出土遺物 ①（2／3）

3～13は細石刃である。11点出土し、石材はすべて黒曜石。部位別では先端部を欠くもの6点、頭部を欠くもの2点、中間部のみ3点である。完形は出土していない。出土した細石刃の幅を比較すると、最大1.25cm、最小0.4cmである。大形（3・4・7～9・12）と小形（5・6・10・11・13）の2群に分かれる傾向がある。3は最も大形であり、作業面再生剥片の可能性がある。4・10は片側縁に、9は両側縁に細石核の側面が残る。11点のうち4点(5・11～13)は、背面に主剥離面と逆方向の剥離面が残るが、どのような行為の痕跡か判断できない。6点(3・4・6・8・11・13)に、使用痕とおぼしき微細な剥離痕がみられる。

14は黒曜石製細石核である。厚手の剥片を素材とし、主剥離面からの調整により石核側面の整形をおこなう。1面認められる細石刃剥離面は、主剥離面と逆方向からの剥離による。その結果、残された細石核の形態は不整形となる。

15～19は加工痕のある剥片である。15～18は黒曜石、19は安山岩。15は不整形剥片の背面右側縁に急角度な調整を施す。左側縁には使用痕とおぼしき微細な剥離痕がみられる。16は幅広の剥片の縁辺に調整を施す。末端部の調整はやや急角度である。右側縁には微細な剥離痕がみられる。17は縦長剥片を素材とし、縁辺に調整を細かく施す。打点および末端部分はやや潰れており、楔として用いられた可能性がある。18は縦長剥片の主剥離面右側縁に背面から調整を施す。調整は打点に近い部分では鋭角、先端に近い部分ではやや急角度である。19は折損した横長剥片の縁辺に調整を施す。背面には主剥離面と同一方向の剥離痕が残る。折損面の打点は主剥離面の打点と近接しており、剥離時の加撃により器体が折損した可能性が高い。

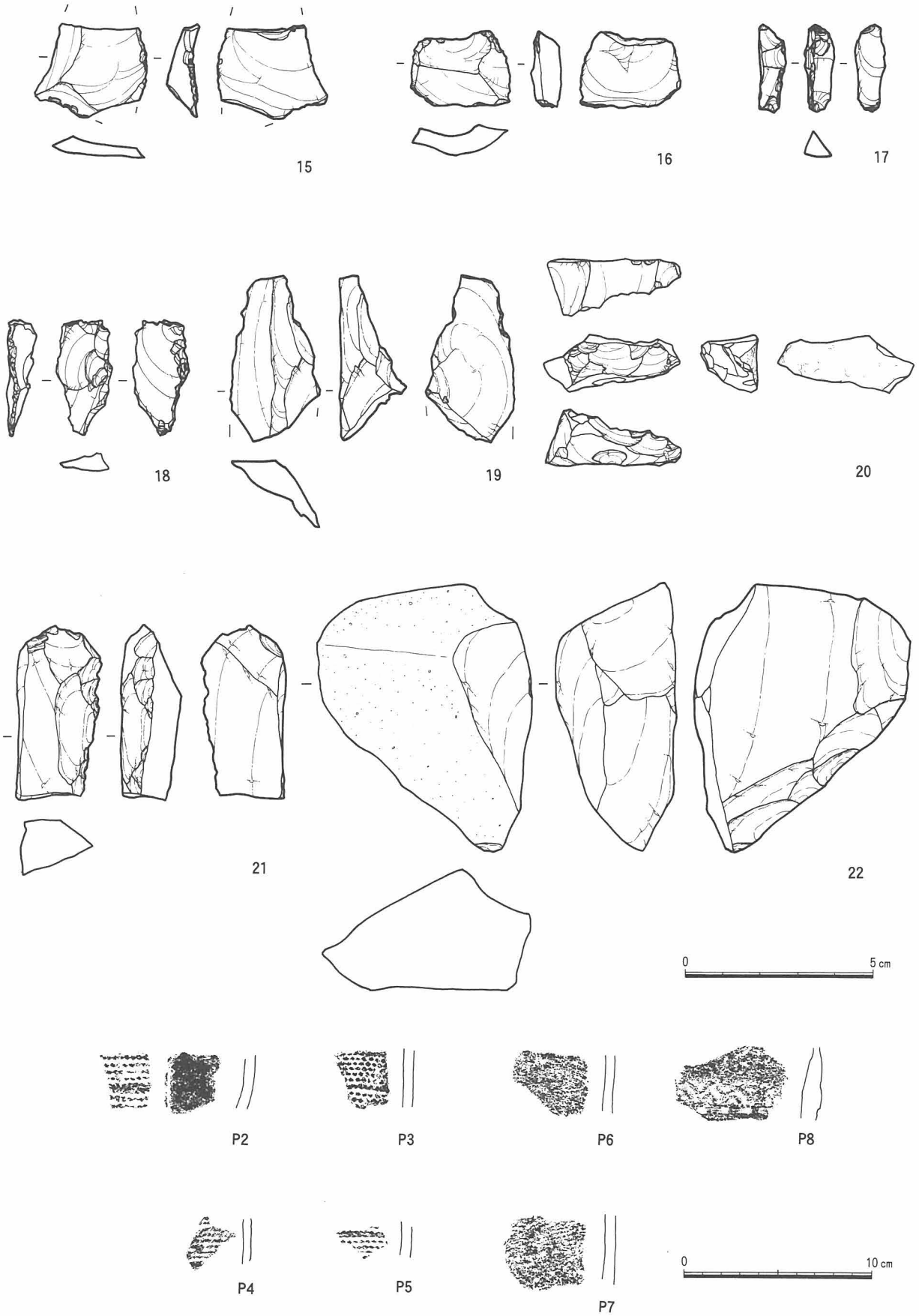
20～22は石核である。20は黒曜石、21は安山岩、22は頁岩。20は一側面に自然面が残る。石核の素材は不明であるが、平坦な面を打面、一側面を作業面とし、剥片剥離作業をおこなっている。21は剥片を素材とする。石核の縁辺で主剥離面から剥片剥離作業をおこなっている。22は表面に自然面が大きく残る剥片もしくは粗割礫を素材とする。石核の縁辺を中心に剥片剥離作業をおこなっている。

土器は4・5層から出土した。P2～P8は縄文土器である。P2～P5は外面に横位の楕円文を施した押型文土器である。P2は内面に縦位の楕円文を施し、P3・P4は内面にナデを施す。いずれも胎土に長石・石英粒を少量含む。P6・P7は表面の摩滅が激しいものの、外面にかすれた擦痕が認められる。P8は外面に山形の押型文および押引文を施す。押型文を施した部分はやや外側に膨らむ。胎土に長石・石英粒をやや多く含む。いずれも小片であるが、P2～P5はおおむね黄島式にあたり、P8は押型文と押引文を併用することから穂谷式に併行すると考えられる。

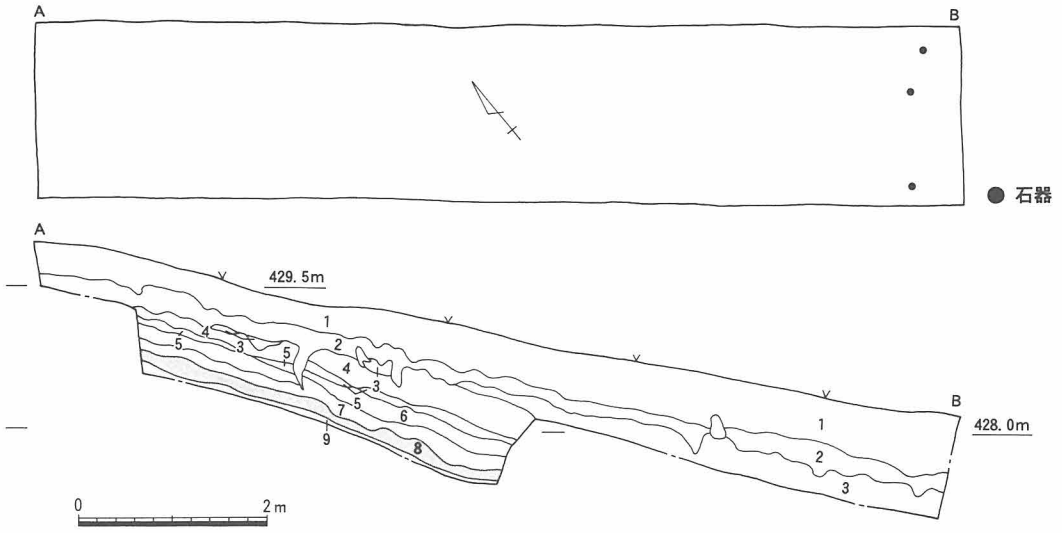
礫は南西部分で3点出土した。出土層位はすべて4層上部であり、縄文時代に帰属する可能性が高い。

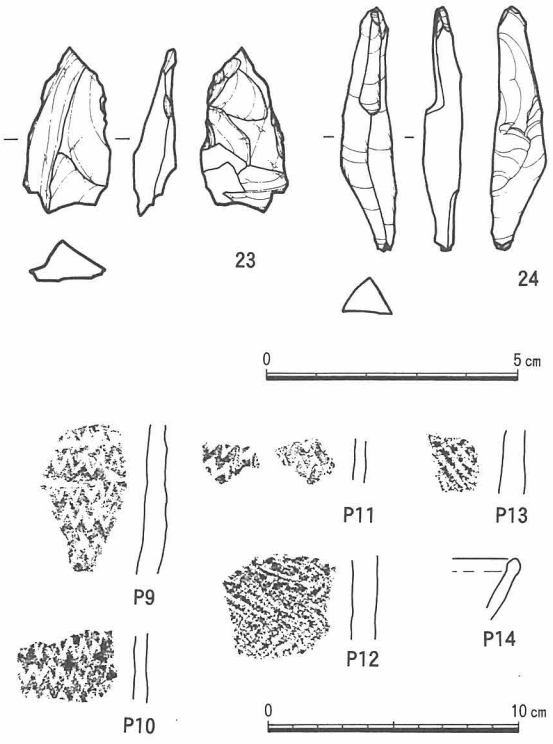
T-18（第25図、図版6・8、第4表）

T-18は、調査地南東部の南東方向へ下る斜面に設定した。現地表高は、トレンチ北西側で約430.0m、南東側で約428.2mである。耕作が及んでいないため、表土層は黒色土となる。地層は南東に向け傾斜する。北東側では3層の堆積が薄く、2層中に4層から遊離した小礫が多く混じる。9層に拳大の礫が多く含まれていたため、その上面で掘り下げを終了した。遺構は確認されていない。



第24図　T-17 出土遺物 ②（2／3・1／3）





第25図　T-18石器分布・断面（1／80）と出土遺物（2／3・1／3）

	黒曜石	安山岩	合　計
加工痕のある剥片		1	1
剥片	1	2	3
合　計	1	3	4

第４表　T-18 石器組成

出土遺物　遺物は１層から石器、縄文土器、中世の須恵器が出土した。

石器は南側から４点出土した。石材は黒曜石１点、安山岩３点である。

23は安山岩製加工痕のある剥片である。主剥離面に左側縁側からやや平坦な調整を施す。24は黒曜石製剥片である。

土器は１層上部から多く出土しており、北西の高所より流入した可能性がある。

P9～P11は外面に山形文を施した押型文土器である。P11は内面にも山形文を施す。P９・P10は胎土に石英粒を少量含む。P12・P13は外面に羽状縄文を施す。胎土に繊維、石英粒を少量含む。P14は中世須恵器であり、椀の口縁部である。

T-19（第26図、図版2・3・7・8、第5表）

T-19は調査地南部に設定し、現地表高は約429.6mである。地層は南東に向け緩やかに傾斜する。トレンチ北部で前回調査西区トレンチ南西部分を確認した。遺構は確認されていない。

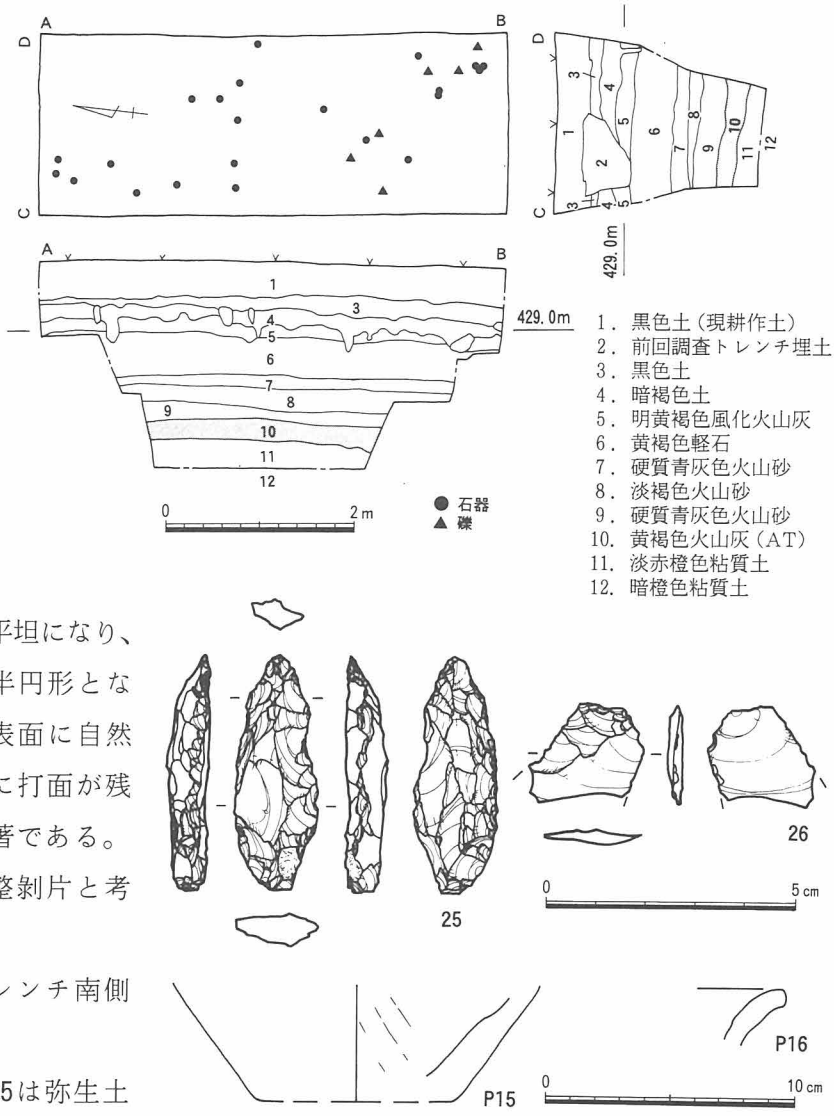
出土遺物　遺物は、３層から５層にかけて石器および礫、弥生土器、土師器が出土した。

石器は３層下部から４層中部を中心に出土し、出土点数は22点である。石器はトレンチ全体に散漫に分布する。石材は、黒曜石12点・安山岩８点・頁岩２点であり、黒曜石が半数を占める。

25は黒曜石製尖頭器である。縦長剥片を素材とし、半両面調整である。表面が裏面に比べ平坦になり、断面は先端部で菱形、中央部で半円形となる。ほぼ全面に調整を施すが、表面に自然面、裏面中央に主剥離面、基部に打面が残る。裏面右側縁に平坦剥離が顕著である。剥片は、26のような尖頭器の調整剥片と考えられるものが目立つ。

礫は４層から６点出土し、トレンチ南側に分布する。

土器は３層から出土した。P15は弥生土器の底部である。P16は土師器の口縁部である。口径が小さいため、ミニチュア土器の可能性がある。また、径の小ささを考慮すれば、口縁ではなく脚台の破片かもしれない。



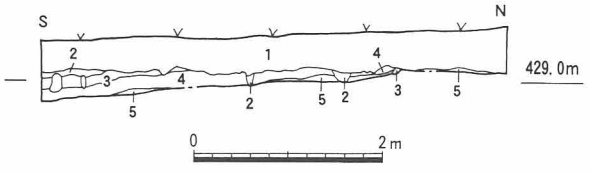
第26図　T-19石器分布・断面（1／80）と出土遺物（2／3・1／3）

	黒曜石	安山岩	頁　岩	合　計
尖頭器	1			1
剥片	9	6	2	17
砕片	2	2		4
合　計	12	8	2	22

第５表　T-19石器組成

T-20（第27図、図版６）

T-20は、調査地南部に南北方向で設定した。現地表高は約429.5mである。遺構は確認されなかったため、地層のみ掲載する。地層は南に向け緩やかに傾斜する。遺物の出土はない。

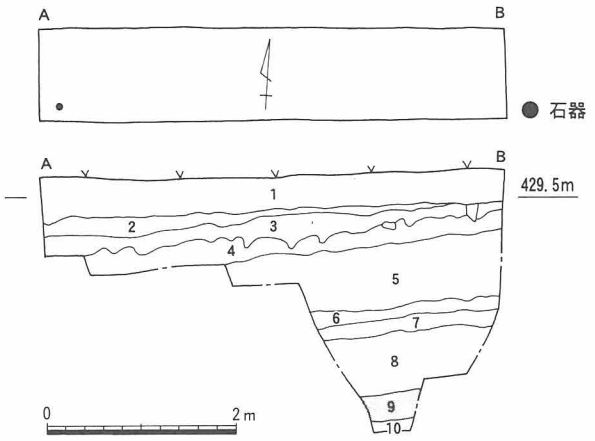


1．黒色土（現耕作土）
2．黒色土
3．暗褐色土
4．明黄褐色風化火山灰
5．黄褐色軽石

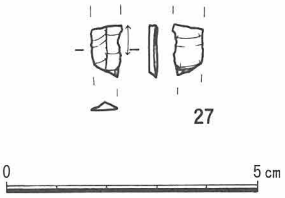
第27図　T-20断面（1／80）

T-21（第28図、第６表）

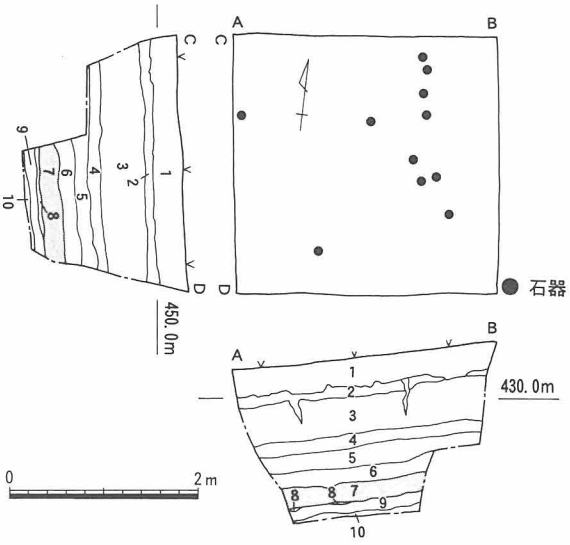
T-21は、調査地中央部やや南寄りに東西方向で設定した。現地表高は約429.8mであ



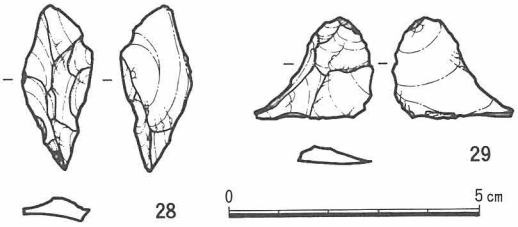
1．黒色土（現耕作土）　6．硬質青灰色火山砂
2．黒色土　7．淡褐色火山砂
3．暗褐色土　8．硬質青灰色火山砂
4．明黄褐色風化火山灰　9．黄褐色火山灰（AT）
5．黄褐色軽石　10．淡赤橙色粘質土



第28図　T-21石器分布・断面（1／80）と出土遺物（2／3）



1．黒色土（耕作土）　6．硬質青灰色火山砂
2．明黄褐色風化火山灰　7．黄褐色火山灰（AT）
3．黄褐色軽石　8．灰白色粘質土
4．硬質青灰色火山砂　9．淡赤橙色粘質土
5．淡褐色火山砂　10．暗橙色粘質土



第29図　T-22石器分布・断面（1／80）と出土遺物（2／3）

	黒曜石	合　計
細石刃	1	1
合　計	1	1

第６表　T-21 石器組成

	黒曜石	安山岩	合　計
剝片	1	10	11
合　計	1	10	11

第７表　T-22 石器組成

る。地層は西に向け緩やかに堆積する。５・８層は厚く堆積し、９層は現地表面から深さ約2.3mに堆積する。大山上部火山灰の堆積に伴い、凹地が埋没したものと考えられる。

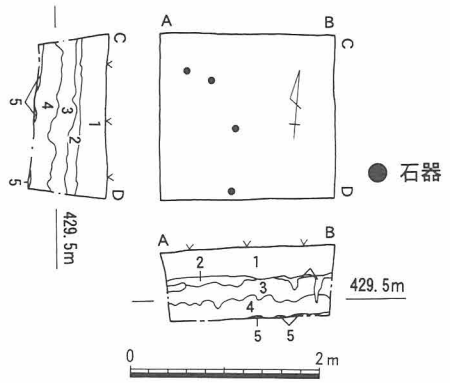
出土遺物　遺物は２・３層から石器、土器が出土した。

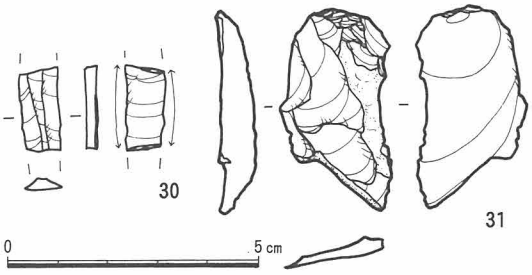
石器は３層から１点出土した。**27**は黒曜石製細石刃である。中間部であり、背面に主剝離面と同一方向の剝離面が残る。土器は２層から出土したが、細片のため図化していない。

T-22（第29図、図版2、第7表）

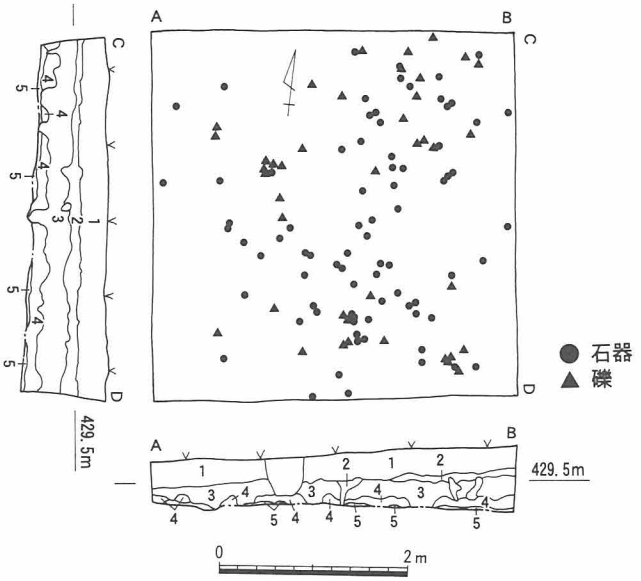
T-22は調査区中央部やや南寄りに設定し、現地表高は約430.4mである。耕作により黒色土層、暗褐色土層は完全に削平され、２層の一部も削平を受けている。地層は西に向け緩やかに傾斜する。遺構は確認されていない。

出土遺物　遺物は２層から石器が出土した。出土点数は12点であり、すべて剝片である。石材は黒曜石が１点、他は安山岩である。**28・29**は背面に複数方向からの剝離面を残す安山岩製剝





第30図　T-23石器分布・断面（1／80）
と出土遺物（2／3）



第31図　T-24石器分布・断面（1／80）

	黒曜石	安山岩	合　計
細石刃	1		1
剝片	1	2	3
合　計	2	2	4

第8表　T-23石器組成

	黒曜石	安山岩	頁　岩	三群変成岩	合　計
尖頭器	11	1			12
スクレイパー	1	2	1		4
加工痕のある剝片	2				2
使用痕のある剝片	2	1			3
石核		1	2		3
剝片	29	12	5	1	47
砕片	6	4			10
合　計	51	21	8	1	81

第9表　T-24石器組成

片であり、尖頭器の調整剝片と考えられる。他の剝片も長さ約1～3cmと小形であり、尖頭器製作に関連する剝片と思われる。

T-23（第30図、図版6・7、第8表）

T-23は調査地南部に設定し、現地表高は約430.0mである。地層は南西に向け緩やかに傾斜する。遺構は確認されていない。

出土遺物　遺物は2・3層から、石器が出土した。出土点数は4点であり、西側に分布する。石材は黒曜石2点、安山岩2点である。30は黒曜石製細石刃である。中間部であり、背面には主剝離面と同一方向の剝離面が残る。両側縁に微細な剝離痕がみられる。31は黒曜石製剝片であり、尖頭器の調整剝片と思われる。

T-24（図31～34、図版2・3・6～8、第9表）

T-24は調査地南部に設定した。当初2m×2mで設定したが、詳細な石器の分布状況を確認するため、東、北へそれぞれ2m広げ、4m×4mのトレンチとなった。現地表高は約429.8mであ

る。地層は南東に向け緩やかに傾斜する。トレンチ西側の地層は東側より高位に位置し、３層上部まで耕作による削平を受けている。また、東側に比べ４層の堆積が薄い。遺構は確認されていない。

出土遺物　２層から４層にかけて石器および礫、土器が出土した。

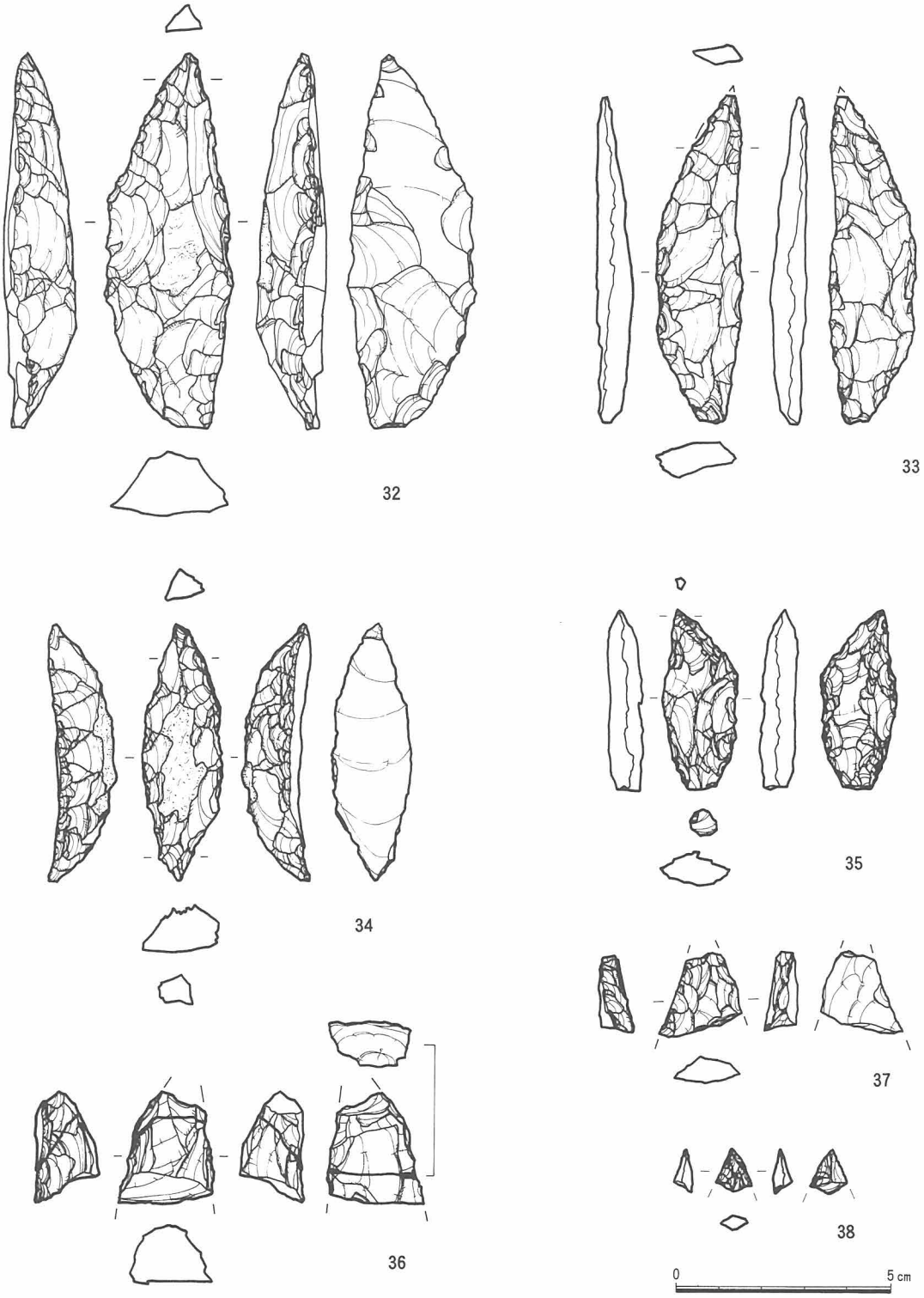
石器は２層下部から３層を中心に出土した。出土点数は81点である。石器の分布はトレンチ全体に広がり、東側にやや片寄る。ただし、西側の石器包含層の一部が、耕作により破壊されているおそれがある。石材は黒曜石51点・安山岩21点・頁岩８点・三群変成岩１点であり、黒曜石が半数を上回る。黒曜石には、表面が著しく風化し、青灰色を呈した石質の一群がある。

32～42は尖頭器である。12点出土し、うち２点は折れ面で接合するため、11点として図化している。石材は、40が安山岩であり、他はすべて黒曜石。

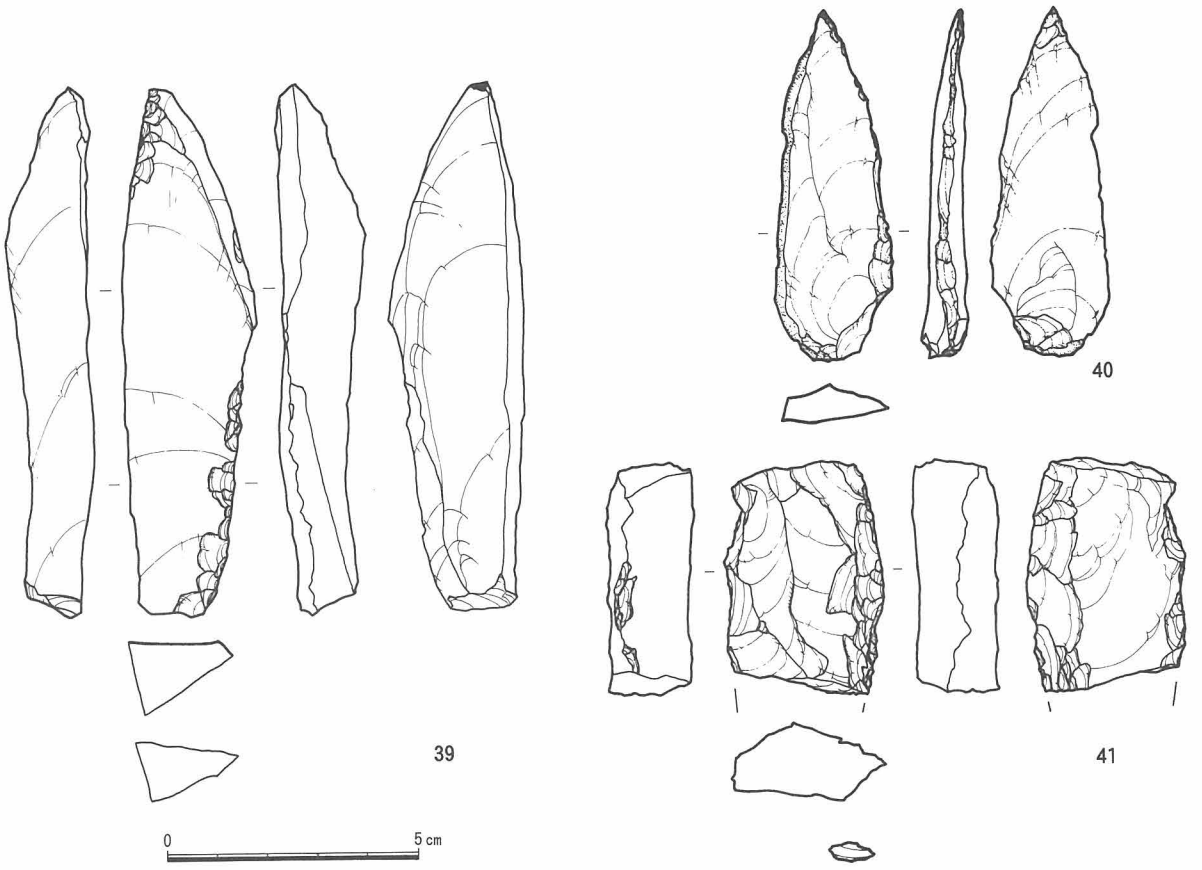
32は縦長剥片を素材とし、半両面調整である。断面は先端部で三角形、中央部で台形もしくは半円形となる。表面は、中央部に自然面が残る以外、全面に調整を施す。調整は先端部で顕著である。裏面は、先端部および下半部に粗く調整を施す。33は細身の両面調整である。先端部の欠失は、調査時の検出作業に伴うものである。先端側が器体の主軸に対して斜位になり、断面は菱形となる。表裏全面に調整を施し、調整は先端部および基部で顕著である。34は湾曲した縦長剥片を素材とし、片面調整である。断面は先端部および基部で三角形、中央部で台形状となる。表面は中央部に自然面が残る以外、全面に調整を施す。左側縁では平坦剥離、右側縁では階段状剥離が目立つ。裏面は先端部のみ調整を施す。形態および調整部位から角錐状石器の範疇で理解することもできるかもしれないが、同様の資料が他に出土していないため、尖頭器として分類した。35は縦長剥片を素材とし、半両面調整である。33同様、先端側が器体の主軸に対して斜位になる。断面はレンズ状である。裏面中央部に主剥離面が残る以外、全面に調整を施す。表面では階段状剥離、裏面では平坦剥離が目立つ。基部の剥離面は、周辺の剥離面より後出であり、基部作出を意図した調整と思われる。36は先端部あるいは基部である。いずれか明確に判別できないが、先端部として図化している。両面調整であり、断面は台形状となる。表裏両面に調整を施す。折れ面の剥離はすべて表面からの加撃による。37は先端部である。横長剥片を素材とし、片面調整である。断面はレンズ状となる。表面の調整は右側縁で顕著である。38は先端部である。表裏両面に調整を施す。調整は表面で顕著である。

39・40は、調整が部分的であり素材の形状を大きく変形しないが、先端の先鋭化を意図した調整がみられるため、尖頭器として分類した。39は折損した縦長剥片を素材とする。折れ面の剥離が意図的な行為によるものか不明である。表面は先端部、右側縁下半部に平坦剥離の調整を施す。裏面は先端部に調整を施す。40は縦長剥片を素材とする。表面は右側縁および基部、裏面は先端部およびバルブ部分に調整を施す。

41・42は未製品と考えられる。41は縦長剥片を素材とする。打面、バルブとも残り、右側縁を中心に両面に調整を施す。調整は粗く、階段状剥離が目立つ。42は縦長剥片を素材とする。打面を残し、表面は打面から、裏面は両側縁から平坦剥離の調整を施す。先行する剥離面は、主剥離面と同方向、逆方向の両者がある。調整が顕著である打面側を先端として図化しているが、折れ面側が先端となる可能性も考えられる。



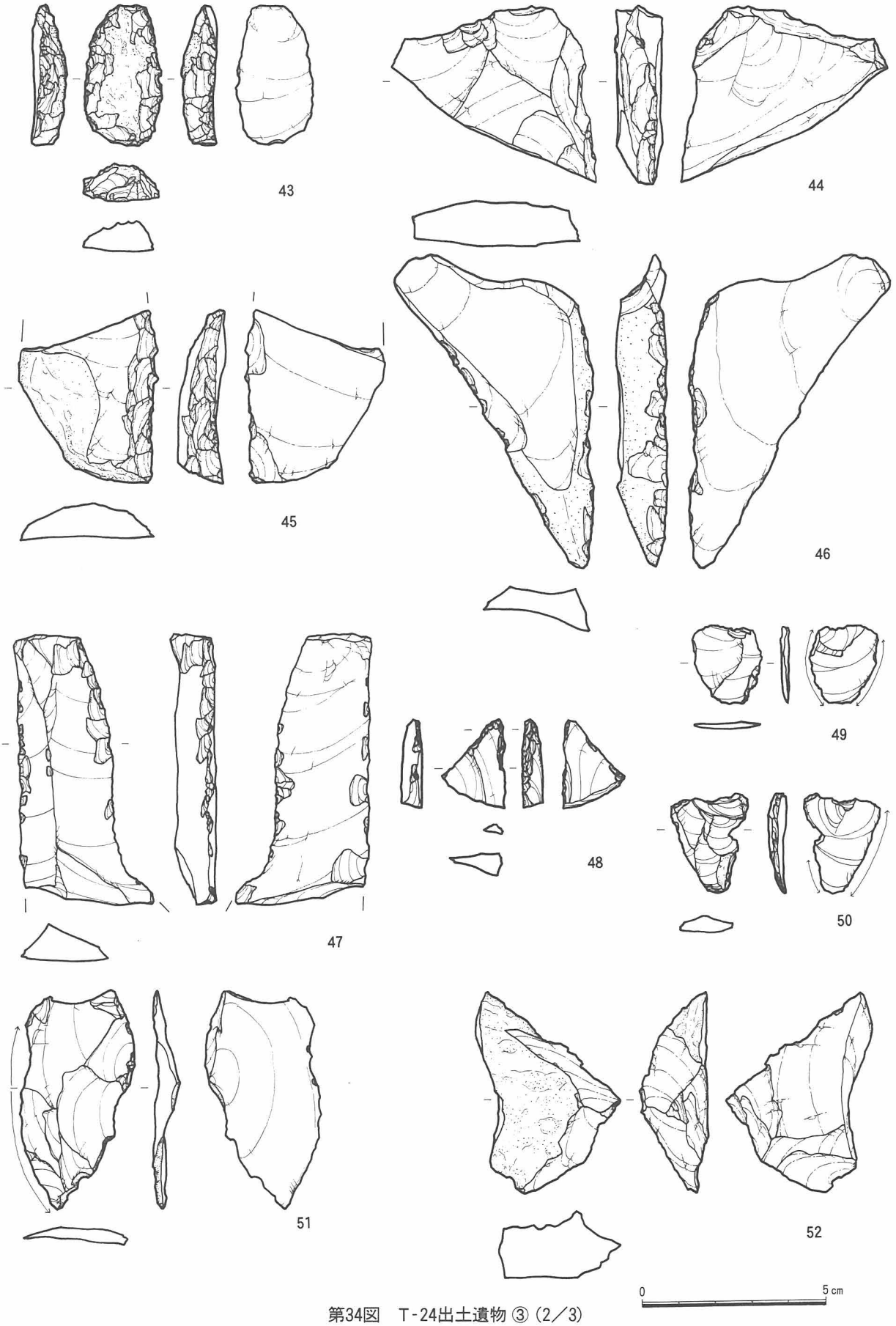
第32図　T-24出土遺物 ①（2／3）



第33図　T-24出土遺物 ②（2／3）

43～46はスクレイパーである。石材は43が黒曜石、44・45が安山岩、46が頁岩。43は縦長剥片を素材とし、拇指状を呈する。末端に急角度な調整を施し、刃部を作出する。背面は中央部に自然面が大きく残る以外、全面に調整を施す。44は折損した不整形剥片を素材とする。右側縁に調整を施し、刃部を作出する。背面には先行する剥離面が求心状に残る。45は縦長剥片を素材とする。右側縁に調整を施し、刃部を作出する。主剥離面には調整を粗く施す。折れ面は刃部調整より後出であるが、折り取りなど意図的な行為によるものか不明である。46は末広状の剥片を素材とする。剥片の末端はウトラパッセになり、石核の底面を取り込む。末端に残る自然面に調整を施し、刃部を作出する。左側縁にも調整を施す。

47・48は加工痕のある剥片である。石材はすべて黒曜石。47は石刃状の縦長剥片を素材とする。背面に主剥離面と同一方向の先行する剥離面が残る。右側縁に調整を施し、両側縁に使用痕とおぼしき剥離痕がみられる。48は横長剥片を素材とし、末端にやや急角度な調整を施す。折れ面は周辺の剥離面より後出である。左側縁の両面に微細な剥離面が連続し、端部はやや潰れる。この剥離面が、調整痕、使用痕のいずれであるか判別しがたいが、錐のように使用された可能性も考えられる。



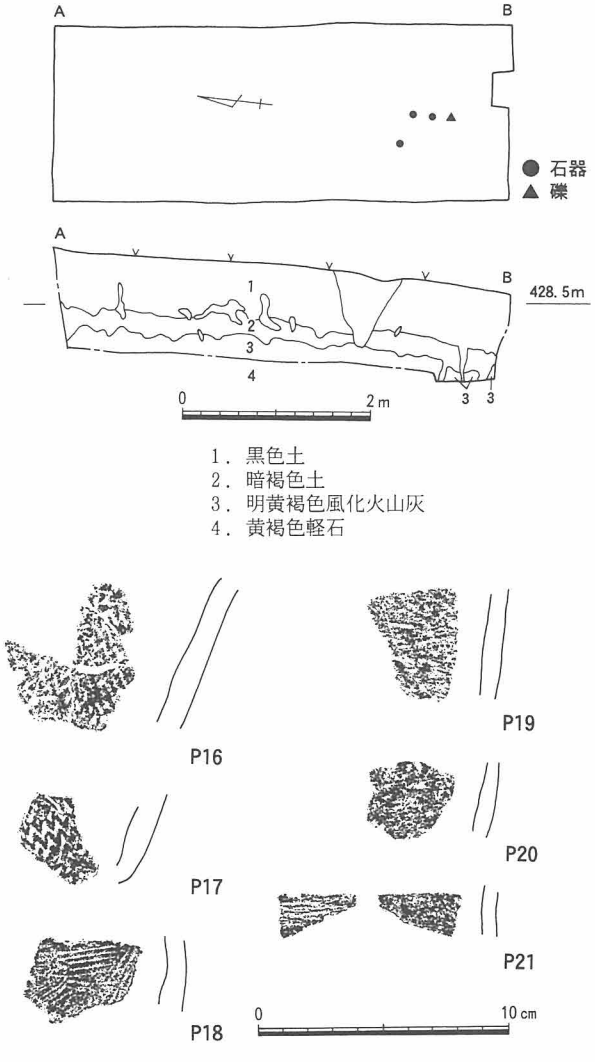
第34図　T-24出土遺物 ③ (2／3)

49～51は使用痕のある剥片である。49・50は黒曜石、51は安山岩。49・50は両側縁に、51は右側縁に微細な剥離痕がみられる。打面および背面の剥離面構成から、いずれも尖頭器の調整剥片である可能性が高い。

52は安山岩製石核である。表面に自然面が残る剥片を素材とし、石核の縁辺で剥片剥離作業をおこなっている。

礫は２層下部から３層にかけて47点出土した。礫の分布はトレンチ全体に広がり、石器同様やや東に片寄る。粗粒・軟質の安山岩・ホルンフェルスなど周辺で採取可能な石材を用いており、赤化した礫を多数含む。

土器は２層から３層上部にかけて出土した。いずれも表面の摩滅が激しい小片であり、図化していない。



第35図　T-25石器分布・断面（1／80）と出土遺物（1／3）

	黒曜石	頁　岩	合　計
剥片	2	1	3
合　計	2	1	3

第10表　T-25 石器組成

T-25（第35図、図版６・８、第10表）

T-25は調査地南部に南北方向で設定し、現地表高は約428.9mである。丘陵の先端部に位置し、土層は南に向け緩やかに傾斜する。遺構は確認されていない。

出土遺物　１層から２層上部にかけて石器、礫および土器が出土した。

石器は３点出土した。石材は黒曜石２点、頁岩1点である。いずれも幅２㎝以下の小形の剥片である。

土器はすべて小片であるが、押型文土器と条痕文土器が大半を占めると思われる。P16・P17は押型文土器である。いずれも上部に比べ下部の径が小さくなるため、尖底の土器の底部近くと思われる。外面に横位の山形文を施し、胎土に石英粒を少量含む。P18は外面に櫛状工具を用いた痕跡を残す。胎土に繊維を少量含む。P19～P21は条痕文土器である。P19・P20は摩滅が激しいものの、外面に条痕文がかすかに認められる。P21は内外面とも条痕文を施し、内面に付着物がみられる。

礫は赤化したものが１点出土した。

T-26（第36図、図版6）

T-26は調査地南部に設定し、現地表高は約429.8mである。遺構は確認されなかったため、地層のみ掲載する。黒色土層および２層上部

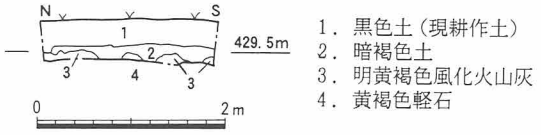
は削平されている。３層は部分的に堆積する。遺物の出土はない。

T-27（第37図、図版６・８、第11表）

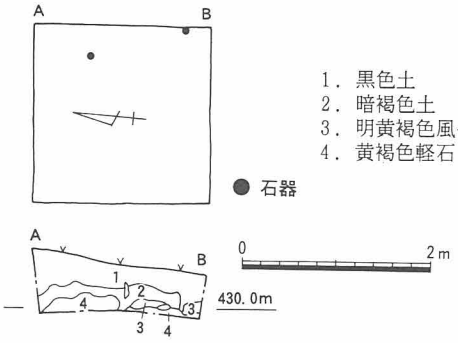
調査地南部に設定し、現地表高は約430.4mである。地層の堆積が薄く、丘陵の南斜面に堆積土が流出していると思われる。１層はしまりのない部分が大半を占める。T-18同様、２層には４層に含まれる礫が混じる。３層は部分的に堆積にする。遺構は確認されていない。

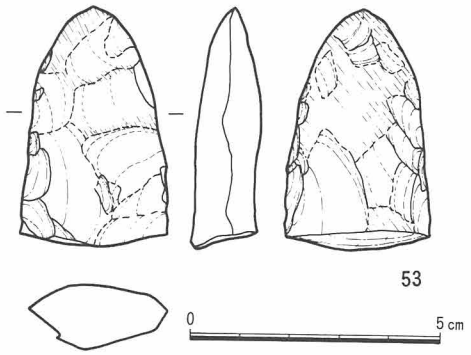
出土遺物　１・２層から石器が２点出土した。石材は安山岩１点、頁岩１点である。

53は局部磨製の石器である。１層上部から出土した。石材は安山岩。剥離面がなす稜線を中心に両面を研磨しており、先端部で顕著である。ただし、調整剥離面が多く残り、研磨により剥離面が完全に消失する部分はわずかである。石剣や旧石器時代ないし縄文時代草創期に帰属する石器などである可能性が考えられるが、詳細は不明である。



第36図　T-26断面（1／80）





第37図　T-27石器分布・断面（1／80）と出土遺物（2／3）

	安山岩	頁　岩	合　計
局部磨製の石器	1		1
剥片		1	1
合　計	1	1	2

第11表　T-27 石器組成

トレンチ	遺　構	遺物・包含層		
		包含層	量	種　別
T-1	－		×	
T-2	ピット		×	
T-3	－		×	
T-4	－		×	
T-5	－		×	
T-6	－		×	
T-7	－		×	
T-8	－		×	
T-9	－		×	
T-10	－		×	
T-11	－		×	
T-12	－		×	
T-13	－	K	△	石器（旧石器）
T-14	－		×	
T-15	－	K	△	石器、縄文土器
T-16	－		×	
T-17	落し穴状土壙	K～S	◎	石器（旧石器）、縄文土器、土器片
T-18	－	K	○	石器、縄文土器、中世須恵器
T-19	－	K～S	◎	石器（旧石器）、弥生土器、土師器
T-20	－		×	
T-21	－	K、Z	△	石器（旧石器）・土器片
T-22	－	S	○	石器（旧石器）
T-23	－	K、Z	△	石器（旧石器）
T-24	－	K～S	◎	石器（旧石器）・土器片
T-25	－	K、Z	○	石器・縄文土器
T-26	－		×	
T-27	－	K、Z	△	石器（旧石器）・局部磨製石器

1．「遺物包含層」は黒色土層をK、暗褐色土層をZ、明黄褐色風化火山灰層をSで示す。
2．「量」は出土した遺物の量を示す。ビニール袋１袋以上を◎、ビニール袋半分程度を○、それ以下を△で示す。

第12表　トレンチ概要一覧

第4章　ま　と　め

民間会社による珪藻土の採掘に伴い、東遺跡の推定範囲約17,000㎡のうち322㎡について、27本のトレンチを設定して調査をおこなった。調査の結果、遺跡の広がりや遺存状況が判明したほか、旧地形についてある程度把握することが出来た。以下、既往の成果を踏まえつつ、今回の調査成果についてまとめる。

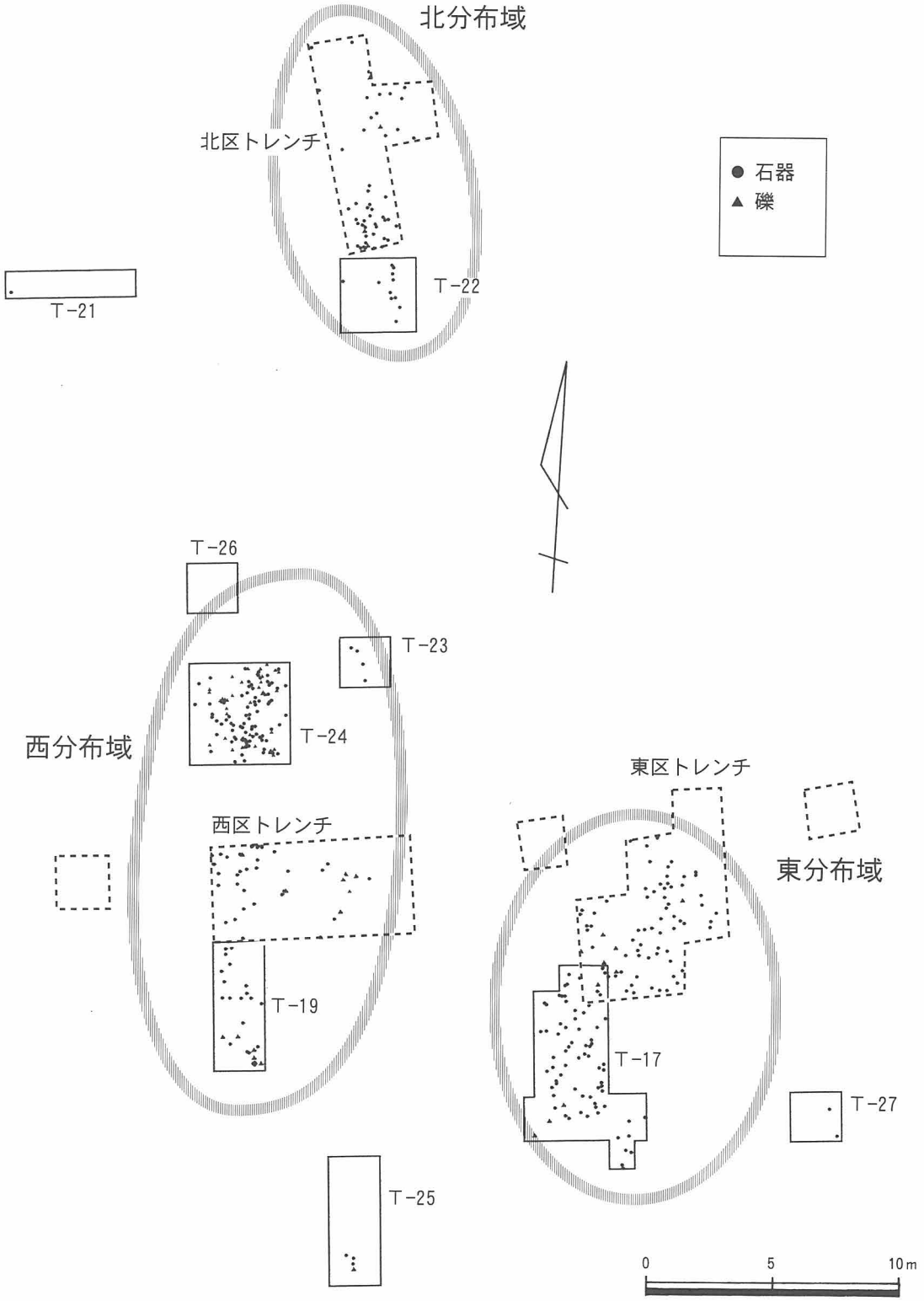
遺跡の立地する低位丘陵の旧地形は、現地形とほぼ一致する。大山上部火山灰に覆われた丘陵は、T-7・T-8がある北西部の高所から丘陵の南端に向け緩やかに下り、南端付近ではT-14からT-18のあるあたりに向けて南東方向に丘陵の最高所が続く。ここを境とし、東側の谷部に向けやや急に、西側に向け緩やかに傾斜する。上述の地形を基本とし、T-5とT-6の間やT-17とT-20の間など、丘陵内では局所的に凹地が存在していたと推定される。遺跡の北にある珪藻土採掘場の露頭を観察すると、地層がしゅう曲した部分が目立つ。調査により想定される凹地も、しゅう曲に伴い形成されたものを含む可能性が高いと思われる。

検出した遺構・遺物は旧石器時代から中世にわたり、大部分は丘陵南端付近に位置するT-15・T-17～T-19・T-22～T-25での調査成果である。これらトレンチの多くは、耕作により包含層の一部が破壊されていると判断される。ただし、旧石器時代の石器包含層のように、地表面からやや深くに位置する場合、良好に発達した地層内に残されている。検出した遺構は少ないものの、多数の遺物が出土した。出土遺物の中心である石器の大半は、旧石器時代に帰属する可能性が高いと考えられる。

旧石器時代の遺物により構成される石器群は、調査地南部で3カ所の分布域を形成する。これらの分布域は、昭和58（1983）年の学術調査（以下、前回調査と称す。）で東区トレンチ、西区トレンチ、北区トレンチから検出された石器群と一連である。T-17が東区、T-19・T-23・T-24が西区、T-22が北区と一連の分布域となる。そこで、各分布域を東分布域、西分布域、北分布域と呼称し、前回調査の成果と合わせ、各分布域の様相を述べる[1]。

東分布域は、細石刃・細石核を主体とし、現時点で東西7.5m、南北13mほどの広がりをもつ。石器包含層は、黒色土層から明黄褐色風化火山灰層であり、黒色土層下部から暗褐色土層が主体となる。石器の分布は、集中することなくトレンチ全体に広がる。石材は黒曜石を主体とし、安山岩・頁岩・三群変成岩が加わる。石器組成は、細石刃・細石核・細石核原形のほかスクレイパー・加工痕のある剥片・使用痕のある剥片などである。石器点数は、138点（前回調査69点、今回調査69点）である。石器分布域には礫が少量伴う。

西分布域は、尖頭器を主体とし、現時点で東西7.5m、南北17.5mほどの広がりをもつ。石器包含層は黒色土層から明黄褐色風化火山灰層であり、黒色土層下部から暗褐色土層が主体となる。石器の分布は北側にやや片寄る。石材は黒曜石を主体とし、安山岩・頁岩・三群変成岩が加わる。黒曜石には、表面が風化し青灰色を呈した石質の一群がある。石器組成は、尖頭器・スクレイパー・錐状石器[2]・加工痕のある剥片・使用痕のある剥片などである。これらの器種は縦長剥片を素材



第38図　石器・礫の分布域（1／250）

とする傾向が強い。また、細石刃が１点出土している。この細石刃が尖頭器石器群に伴うものか、詳細は不明である。石器点数は、141点（前回調査34点、今回調査107点）である。石器分布域には礫が伴い、礫群として認識できるものを含む。

	黒曜石	安山岩	頁　岩	三群変成岩	合　計
細石刃	11　8 19				11　8 19
細石核	1　1 2				1　1 2
細石核原形	2 2				2 2
スクレイパー	2 2				2 2
加工痕のある剥片	4　1 5	1 1			5　1 6
使用痕のある剥片	1 1				1 1
石　核	1 1	1　1 2	3　2 5	2 2	7　3 10
剥　片	13　26 39	12　9 21	10　9 19	6　1 7	41　45 86
砕　片	2　6 8	2 2			4　6 10
合　計	32　47 79	16　10 26	13　11 24	8　1 9	69　69 138

(1)　東分布域石器組成

	黒曜石	安山岩	頁　岩	三群変成岩	合　計
尖頭器	12　2 14	1　2 3			13　4 17
細石刃	1 1				1 1
スクレイパー	1　1 2	2　1 3	1 1		4　2 6
錐状石器	1 1				1 1
加工痕のある剥片	2 2				2 2
使用痕のある剥片	2 2	1 1			3 3
石　核		1 1	2　1 3	1 1	3　2 5
剥　片	39　12 51	20　12 32	7 7	1 1	67　24 91
砕　片	8　1 9	6 6			14　1 15
合　計	65　17 82	31　15 46	10　1 11	1　1 2	107　34 141

(2)　西分布域石器組成

	黒曜石	安山岩	頁　岩	三群変成岩	合　計
尖頭器	2 2	4 4			6 6
使用痕のある剥片	1 1				1 1
剥　片	1　8 9	10　29 39			11　37 48
合　計	1　11 12	10　33 43			11　44 55

(3)　北分布域石器組成

第13表　各分布域の石器組成

（上段左：今回調査出土点数、上段右：前回調査出土点数、下段：合計）

北分布域は、尖頭器を主体とし、現時点で東西５m、南北12mの広がりをもつ。石器包含層は暗褐色層から明黄褐色風化火山灰土層であり、暗褐色層下部から明黄褐色風化火山灰層が主体となる。現在は、明黄褐色風化火山灰層上部まで削平を受け、包含層の遺存状況はきわめて悪い。石材は安山岩を主体とし、黒曜石が加わる。石器組成は、尖頭器・使用痕のある剥片などである。石器点数は、55点（前回調査44点、今回調査11点）である。石器分布域には礫が少量伴う。

東分布域では、前回調査で角柱形細石核が出土し、船野型に類する船底形細石核が表面採集されていることから、この分布域の石器群は、西南日本的な細石刃石器群の特徴をもつと思われる。

西分布域および北分布域の石器群は、ともに尖頭器を主体とし、共通点が多くみられる。

石器組成には、尖頭器・同未製品や調整剥片など尖頭器製作に関連する器種が多く含まれる。しかし、石核は、安山岩製１点・頁岩製２点・三群変成岩製１点の計４点のみであり、黒曜石製は出土していない。剥片についても、尖頭器製作に伴って生じたことを考慮すれば、その数は必ずしも多くはない。多数の尖頭器に比較すると、石核・剥片

など石器製作に伴う残滓が希薄といえる。資料群に制約があるものの、上述した組成上の特徴から、遺跡内における尖頭器の製作が、未製品や素材などある程度製作工程の進んだ段階から開始された蓋然性が示唆される。

尖頭器は、長さ10cm以上から5cm未満まで大きさに差があるものの、黒曜石製に比べ安山岩製が大きい傾向があり、石材による大きさの相違が指摘できる。素材面を残す半両面調整もしくは片面調整が、両面調整を上回る。自然面を残す資料が多く、全体的に器体の調整がやや粗い印象を受ける。詳細にみると、白石氏が指摘するように[3]、打面を残す、先端部の調整が顕著であるといった技術的特徴を指摘できる。また第32図の33や35のように、器形が左右対称にならず、器体の主軸に対し先端側が斜位になる形態の資料がある。前回調査時に北分布域からも同形態の資料が出土しており、本遺跡の尖頭器資料群を特徴付ける要素の１つである。このような諸要素を抽出し、いくつかの類型を設定したうえで、資料群の性格を追究することも可能だが、石器群全体の様相がなお不明である現時点において、こうした方法を用いることは問題があると思われるため、今後の検討課題としておく。

そうした共通点をもつ一方、両分布域の石器群には、主体となる石器包含層、石器組成、構成石材、礫の分布などに相違点が看取される。

なお、本書では個別資料の報告に重点をおき、個別資料の平面・垂直分布、分布域の時間的関係、資料の接合関係など石器群に係わる仔細な分析については、報告していない。これらの分析については、今後予定される調査と合わせたうえで、一つの遺跡として総体的に報告する予定である。

その他、T-13・T-15・T-18・T-21・T-25からも石器が出土している。T-13・T-21では細石刃が単独で出土した。T-25から出土した石器はいずれも剥片であるが、西分布域がさらに南に広がる可能性をもつ。T-27から出土した局部磨製の石器・剥片は、東分布域の周縁部分に位置付けられるかもしれない。T-15・T-18の石器はいずれも黒色土層からの出土である。旧石器時代と特定できる器種を伴わず、縄文土器が同一層位で近接して出土するため、縄文時代に帰属すると思われる。

また、黄褐色軽石層より下位の地層では石器包含層は確認されなかったが、いずれのトレンチも調査面積はきわめて狭小であり、なお石器包含層が存在する可能性を残す。

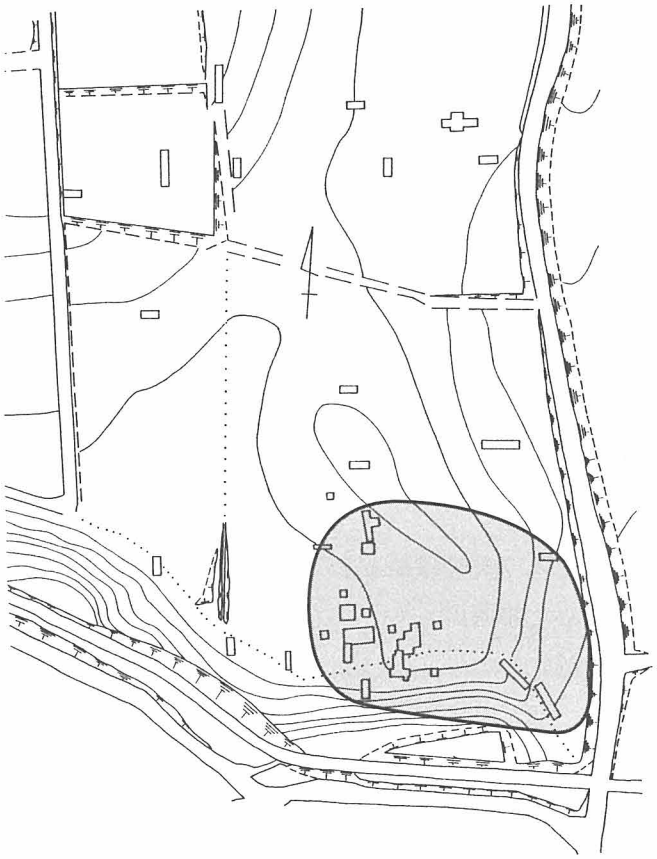
縄文時代に該当する遺構は、T-17の落し穴状遺構である。埋土の堆積状況および同トレンチから押型文土器が出土していることから、縄文時代早期に帰属すると考えられる。遺物は、T-15•T-17•T-18・T-25から押型文土器および条痕文土器が出土し、おおむね縄文時代早期から前期に帰属すると思われる。落し穴状土壙は、一遺跡内から複数検出される例が多いため、同種の遺構が他に存在する可能性が高い。

弥生時代に該当する遺構は確認されなかった。ただし、前回調査北区トレンチで中期後葉以降のピットが検出されており、その周辺および土器が若干出土した丘陵南端に、遺構が存在する可能性がある。

古墳時代以降については、T-19の土師器、T-18の中世の須恵器などごく少量の遺物が出土したのみであり、遺構は確認されていない。該期の遺構が遺跡内に存在する可能性は低いと思われる。また、T-2ではピットが１基検出されたが、周辺に他の遺構は確認されなかった。遺物が出土し

ていないため、時期の特定は困難だが、比較的新しい時代に属する可能性も考えられる。

以上のように、東遺跡は丘陵南端付辺に広がる旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡である。このことは、前回調査の成果と一致し、東遺跡の規模や性格をより鮮明にすることができた。遺跡は北限をT-16とT-22の間、東限をT-13、T-15、西限をT-19とT-20の間として丘陵南端に広がる。推定面積はおよそ3,500㎡となる。ただし、東部分は谷部に近く、遺構・遺物の分布が希薄である可能性が高い。



第39図　遺跡の推定範囲（1／2,000）

最後に、本遺跡の今後の取り扱いについて記す。調査終了後おこなわれた依頼主である昭和化学工業株式会社との協議の結果、東遺跡については事業計画上現状のまま保存することは難しく、記録保存の措置を講ずることとなった。遺跡を本来の姿で残すことができなかったのは残念だが、埋蔵文化財保護に対する理解のもと、調査体制の整備、様々な手続きを経て遺跡の保護が図られるようになったことは、当然のことかもしれないが、本地域の埋蔵文化財保護行政を推進するうえで小さくても、大きな一歩であることに間違いない。

註

(1) 第38図、第14表をはじめとする前回調査成果の引用に関しては、すべて既報告（白石純・小林博昭「蒜山原東遺跡の発掘調査」『岡山理科大学自然科学研究所研究報告』27　岡山理科大学自然科学研究所　2001年）に基づく。
(2) 前回調査の報告では、錐状石器については縄文時代早期に帰属する可能性が指摘されている。
(3) 白石純「10. まとめ」前掲報告

付編　東遺跡出土石器の石材について

岡山理科大学自然科学研究所
白　石　　純

1　はじめに

東遺跡では、おもに安山岩および黒曜石製の石器が出土している。特に黒曜石製の石器では、肉眼観察で複数の原産地に分類が可能である。この分析では、石器表面の風化具合が安山岩に類似し、黒曜石と区別しにくい石材があり、観察者が異なれば香川県坂出市で産出するハリ質安山岩によく似ているとの見解がある。そこで、この黒曜石(?)製石器の材質を調べ岩石学的に検討した。また、蛍光X線分析法でこの石器に含まれている成分(元素)の定量値を測定し、黒曜石原産地と比較検討した。

2　蛍光X線分析による産地推定

分析した石器は、第1表に示した7点の石器である。器種はいずれも剥片である。

産地推定方法は、測定できた13元素（Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Rb、Sr、Zr）の中から黒曜石の原産地間で違いのある元素を用いて、X Y散布図を作成し産地推定を試みた。その結果、特にTi、Fe、Ca、Kの各元素に違いがあることから、Fe／Ti比とK／Ca比をとり散布図により検討した。

第1図Fe／Ti－K／Ca散布図では、島根県隠岐島(久見、津井、加茂)、長崎県大崎・淀姫、佐賀県腰岳、香川県坂出市神谷町で産出するハリ質安山岩の5地域の黒曜石原産地分布範囲を示している。そして、この原産地分布範囲図に東遺跡出土の石器をプロットすると、いずれも島根県隠岐島原産地に分布した。この結果から、今回分析した東遺跡出土の石器は隠岐原産地原石に分析値が類似しているようである。

3　偏光顕微鏡観察による産地推定

ここでは、偏光顕微鏡(以下顕微鏡)により黒曜石原産地原石と東遺跡出土の風化が激しく黒曜石か安山岩か肉眼では判別できなかった石器について、薄片試料を作製し検討した。なお、顕微鏡観察のため石器を破壊しなければならない。そのため、分析した試料は、耕作土中より採取された剥片3点を使用した。

【原産地試料】

島根県隠岐の黒曜石原産地原石を観察した。この地域の原産地は、おもに3地点(久見・津井・加茂)が知られている。今回の顕微鏡観察では、3地点の原石ともほぼ同じ組織構造、鉱物が観察された。

写真1-1•2は、加茂原産地の試料で、石基はガラスで構成され、このガラスにはクリスタライトが含まれている。また、微斑晶の斜長石(0.1mm前後)が認められた。他の原産地もほぼ同様な組織構造であった。この他に微細な不透明鉱物が見られる。

写真２-１•２は、香川県坂出市で採取したハリ質安山岩(1)である。石基はガラス質で、茶褐色のガラス(1mm～2mm)を少し含んでいる。また、微斑晶の斜長石（0.1mm以下）が認められた。

【東遺跡の石器試料】

破壊分析のため表面採取の石器３点を分析した。

試料番号２（写真３-１•２)は石基がガラスで構成され、このガラスにはクリスタライトが含まれ、微斑晶の斜長石(0.1mm～0.2mm)が認められた。また、まれに0.2mm前後の斜方輝石や、微細な不透明鉱物が観察された。

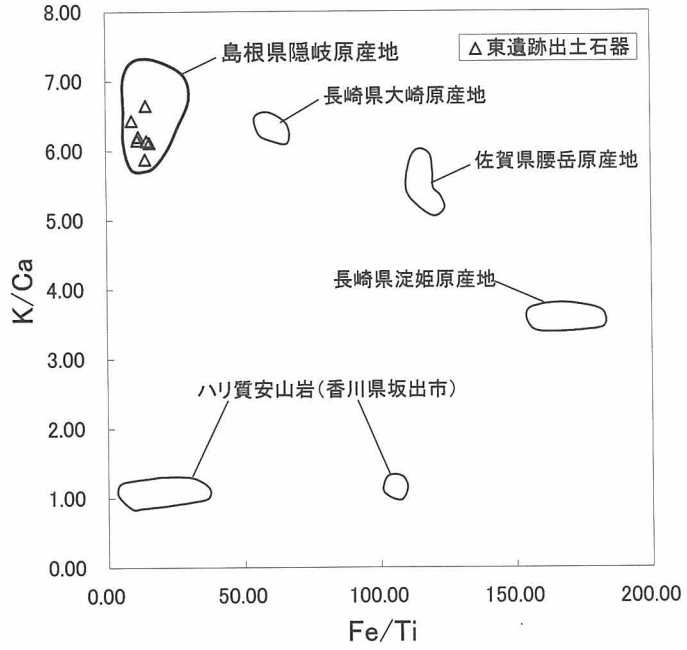
試料番号３（写真４-１•２)も２とほぼ同じ組織構造であった。

4　分析結果

蛍光Ｘ線分析と顕微鏡観察による石材の産地推定を実施した。この結果、東遺跡出土の黒曜石かどうか明確でなかった石器の石材は、両分析で隠岐の黒曜石にもっとも類似していた。ただ、構成鉱物に斜長石の微斑晶が多く含まれており、隠岐の黒曜石原産地でも今回分析した原産地以外の地点がある可能性がでてきた。今後、原産地試料を蓄積する必要がある。

第１表　東遺跡出土石器の分析値(%) ただし、Rb•Sr•Zrはppm。

試料番号	出土地区•取上番号	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	T-24(耕作土)	72.31	0.28	14.19	2.65	0.07	1.29	0.79	3.10	5.08	0.05	369	3	671
2	T-19(耕作土)	71.30	0.22	14.22	2.61	0.06	1.35	0.80	4.16	4.96	0.09	326	2	624
3	T-24(耕作土)	72.02	0.18	13.89	2.68	0.08	1.40	0.80	3.83	4.91	0.06	338	0	616
4	T-24N-11	71.76	0.18	14.06	2.63	0.06	1.43	0.74	3.95	4.92	0.06	351	0	598
5	T-17N-22	71.91	0.18	14.20	2.87	0.07	1.43	0.81	3.41	4.95	0.00	334	0	686
6	T-24N-29	71.20	0.22	14.31	2.52	0.06	1.41	0.80	4.34	4.92	0.02	330	10	643
7	T-24N-35	71.90	0.19	13.93	2.71	0.08	1.40	0.81	3.97	4.76	0.08	342	1	642



第１図　東遺跡出土石器と原産地の比較（Fe／Ti-K／Ca）

註

(1)　この石材は考古学でハリ質安山岩と呼ばれ、おもに細石刃文化期に瀬戸内海地域で使用されている石材で、記載岩石学では流紋岩に近いものである。

引用文献

鎌木義昌、東村武信、藁科哲男、三宅　寛 1984「黒曜石、サヌカイト製石器の産地推定による古文交流の研究」『古文化財の自然科学的研究』pp:333-359 同朋舎。

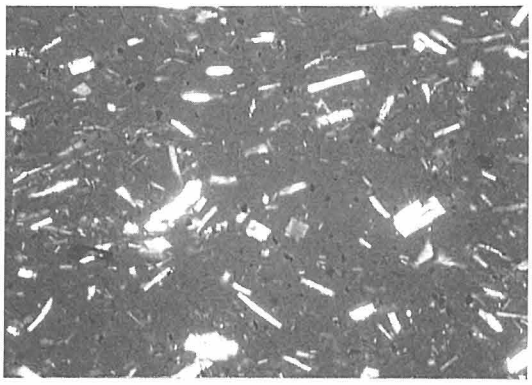


写真1-1　加茂産原石（島根県隠岐）直交ニコル

写真1-2　加茂産原石（島根県隠岐）平行ニコル

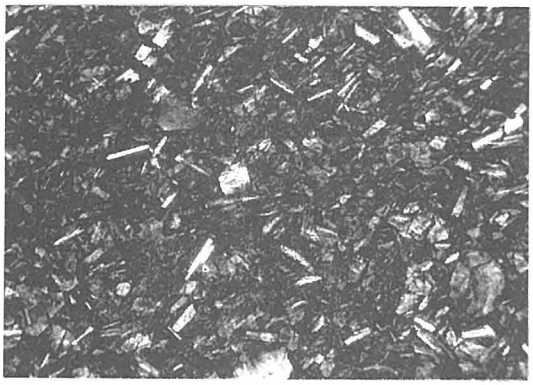


写真2-1　ハリ質安山岩原石（香川県坂出市）直交ニコル

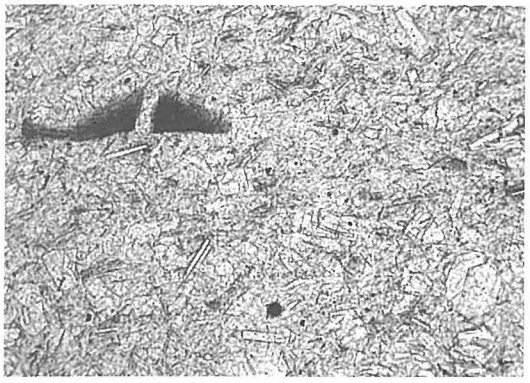


写真2-2　ハリ質安山岩原石（香川県坂出市）平行ニコル

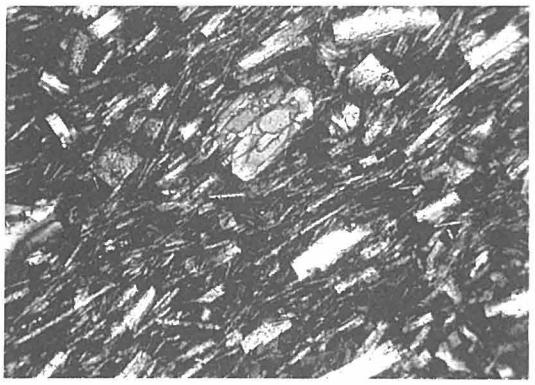


写真3-1　東遺跡出土石器No. 2　直交ニコル

写真3-2　東遺跡出土石器No. 2　平行ニコル

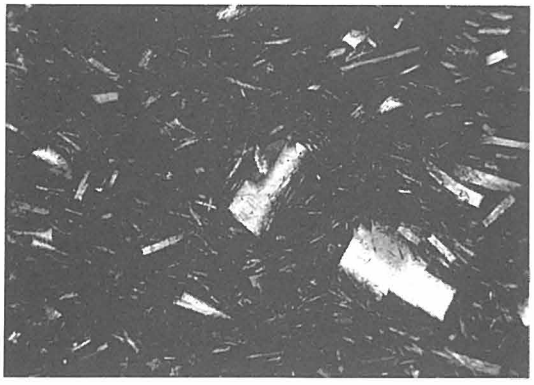


写真4-1　東遺跡出土石器No. 3　直交ニコル

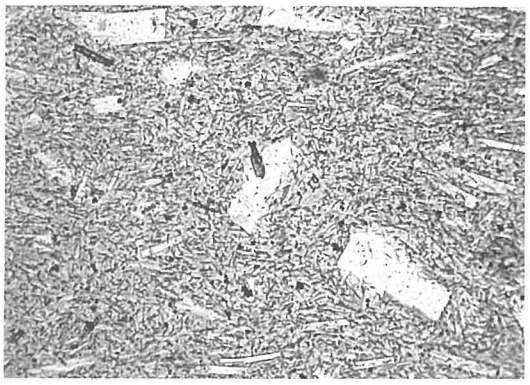


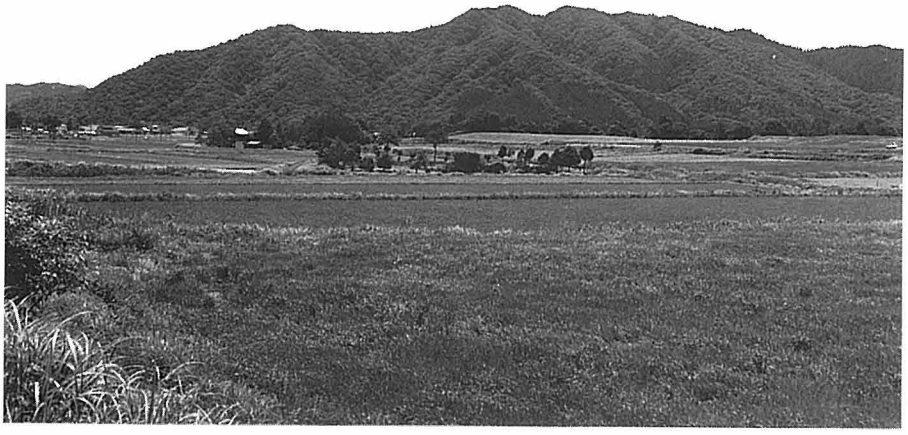
写真4-2　東遺跡出土石器No. 3　平行ニコル

偏光顕微鏡観察写真

出土トレンチ	挿図番号	No.	取上番号	器　種	石　材	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重量(g)
T-13	17	1	T13-1	細石刃	黒曜石	1.80	0.75	0.20	0.15
T-15	19	2	T15-8	加工痕のある剥片	黒曜石	1.10	1.50	0.40	0.69
T-17	22	3	T17N-16	細石刃	黒曜石	2.50	1.25	0.35	1.01
		4	T17N-19	細石刃	黒曜石	2.60	0.85	0.50	0.83
		5	T17-12	細石刃	黒曜石	1.50	0.40	0.20	0.14
		6	T17N-8	細石刃	黒曜石	2.72	0.50	0.20	0.14
		7	T17-9	細石刃	黒曜石	1.00	0.80	0.25	0.16
		8	T17N-1	細石刃	黒曜石	1.45	0.85	0.25	0.26
		9	T17N-54	細石刃	黒曜石	2.70	1.00	0.40	0.57
		10	T17N-34	細石刃	黒曜石	1.80	0.50	0.30	0.25
		11	T17-7	細石刃	黒曜石	1.15	0.50	0.15	0.08
		12	T17N-42	細石刃	黒曜石	1.10	0.90	0.30	0.28
		13	T17N-21	細石刃	黒曜石	0.85	0.60	0.25	0.12
		14	T17-3	細石核	黒曜石	2.45	2.65	2.10	11.07
	23	15	T17-11	加工痕のある剥片	黒曜石	2.50	3.40	0.85	3.13
		16	T17N-11	加工痕のある剥片	黒曜石	2.00	2.70	0.80	3.35
		17	T17N-38	加工痕のある剥片	黒曜石	2.25	0.95	0.56	0.99
		18	T17N-39	加工痕のある剥片	黒曜石	3.05	1.35	0.52	2.28
		19	T17N-27	加工痕のある剥片	安山岩	2.90	4.10	0.80	8.01
		20	T17-23	石　核	黒曜石	3.50	1.50	1.55	6.04
		21	T17N-33	石　核	安山岩	2.30	4.60	1.40	18.77
		22	T17-15	石　核	頁　岩	7.05	5.70	2.60	123.10
T-18	24	23	T18-3	加工痕のある剥片	安山岩	1.60	3.25	0.74	2.97
		24	T18-4	剥　片	黒曜石	4.80	1.10	0.80	2.36
T-19	25	25	T19-26	尖頭器	黒曜石	4.20	1.70	0.90	6.01
		26	T19-4	剥　片	黒曜石	2.05	3.10	0.25	0.99
T-21	27	27	T21-1	細石刃	黒曜石	1.00	0.60	0.15	0.11
T-22	28	28	T22-9	剥　片	安山岩	2.60	1.70	0.40	1.60
		29	T22-4	剥　片	安山岩	1.40	3.30	0.50	1.73
T-23	29	30	T23-1	細石刃	黒曜石	1.65	0.85	0.25	0.37
		31	T23-2	剥　片	黒曜石	4.05	2.20	0.75	3.74
T-24	31	32	T24-14	尖頭器	黒曜石	8.70	3.00	2.10	32.99
		33	T24N-30	尖頭器	黒曜石	7.55	2.00	0.90	9.67
		34	T24E-12	尖頭器	黒曜石	5.95	1.85	1.55	13.04
		35	T24N-39	尖頭器	黒曜石	4.15	1.70	0.70	5.43
		36	T24-3+6	尖頭器	黒曜石	2.60	2.20	1.50	7.02
		37	T24E-2	尖頭器	黒曜石	1.75	2.00	0.80	2.07
		38	T24N-4	尖頭器	黒曜石	1.00	0.90	0.40	0.22
	32	39	T24N-33	尖頭器	黒曜石	10.55	2.65	1.70	38.12
		40	T24-5	尖頭器	安山岩	6.90	2.40	0.95	12.63
		41	T24N-14	尖頭器	黒曜石	4.65	3.15	1.75	30.80
		42	T24N-5	尖頭器	黒曜石	5.15	2.40	1.00	10.14
	33	43	T24-1	スクレイパー	黒曜石	3.80	2.10	0.95	7.24
		44	T24-8	スクレイパー	安山岩	4.70	5.60	1.30	33.54
		45	T24-10	スクレイパー	安山岩	4.70	3.80	1.30	20.36
		46	T24E-24	スクレイパー	頁　岩	5.40	8.45	1.40	32.78
		47	T24-9	加工痕のある剥片	黒曜石	7.30	3.70	1.20	21.99
		48	T24N-28	加工痕のある剥片	黒曜石	2.40	1.70	0.60	1.57
		49	T24E-32	使用痕のある剥片	黒曜石	2.10	1.85	2.50	0.91
		50	T24N-13	使用痕のある剥片	黒曜石	2.65	2.05	0.42	1.68
		51	T24-2	使用痕のある剥片	安山岩	5.90	3.10	0.75	6.88
		52	T24E-17	石　核	安山岩	4.00	5.30	1.75	26.78
T-27	36	53	T27-1	局部磨製の石器	安山岩	4.75	2.90	1.40	21.38

第14表　石器観察表

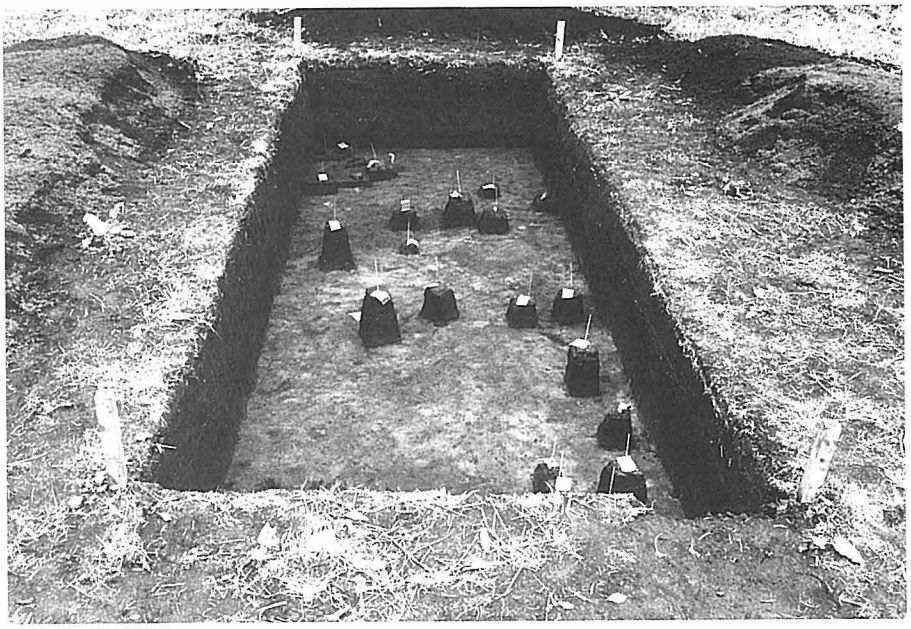
1．調査地遠景①
（北東から）



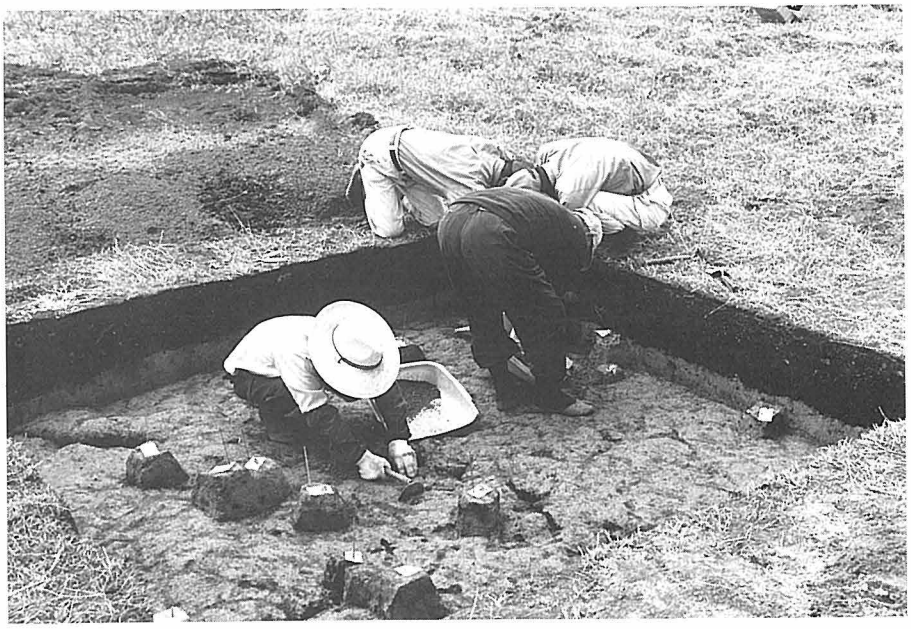
2．調査地遠景②
（北東から）

3．T-17（拡張部分）
（北東から）

図版 2



1．T-19
（北から）



2．T-22 調 査 風 景
（北東から）

3．T-24（拡張部分）
（南西から）

1．T-17
落し穴状土壙
（南から）

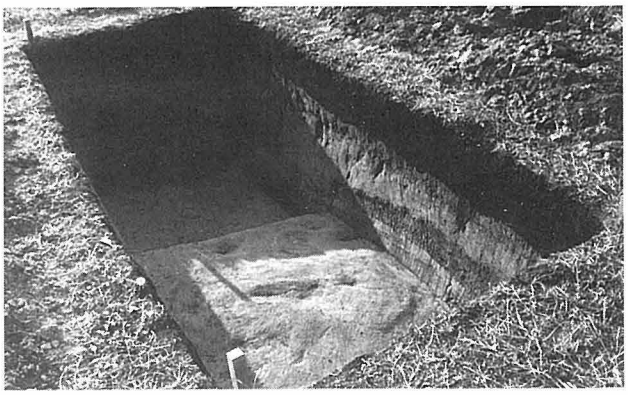
2．T-17 細石核
（南から）

3．T-19 尖頭器
（西から）

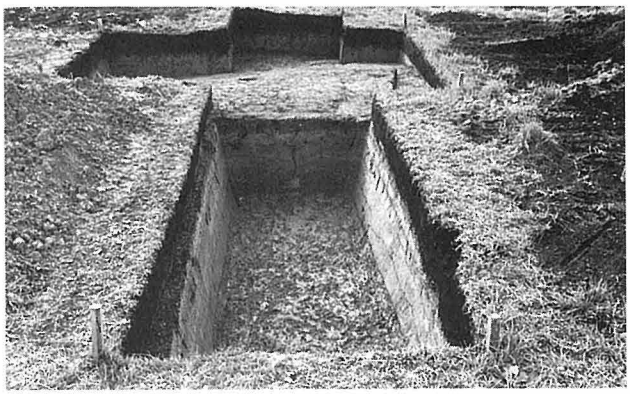
4．T-24
加工痕のある剥片
（南西から）

5．T-27
局部磨製の石器
（南西から）

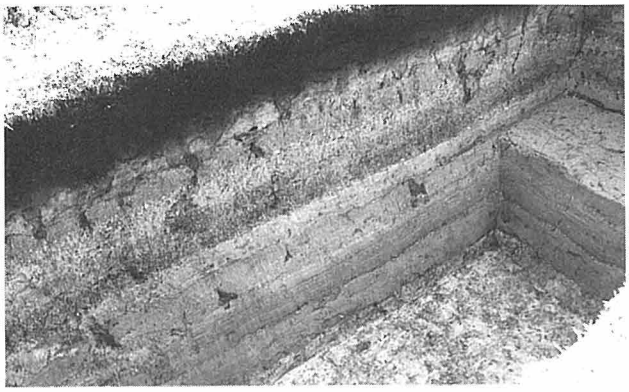
図版 4



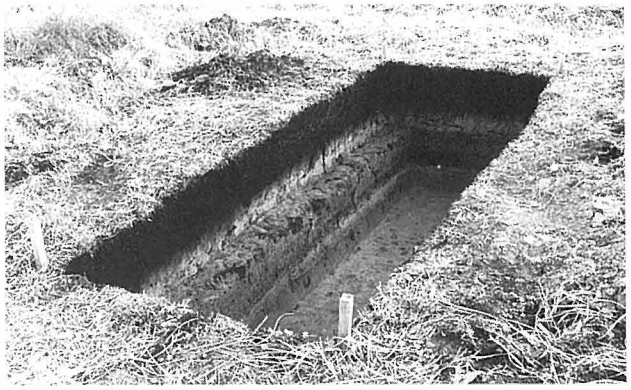
1．T-1（南東から）



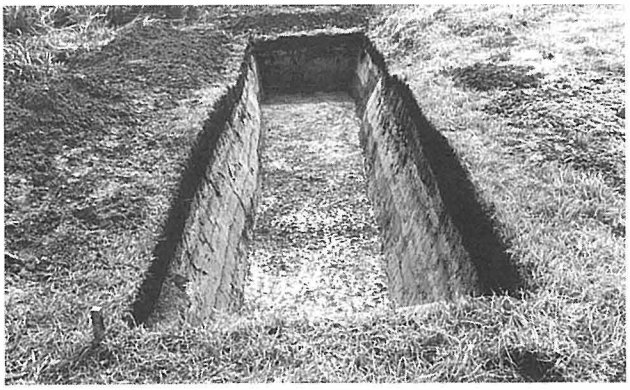
2．T-2（東から）



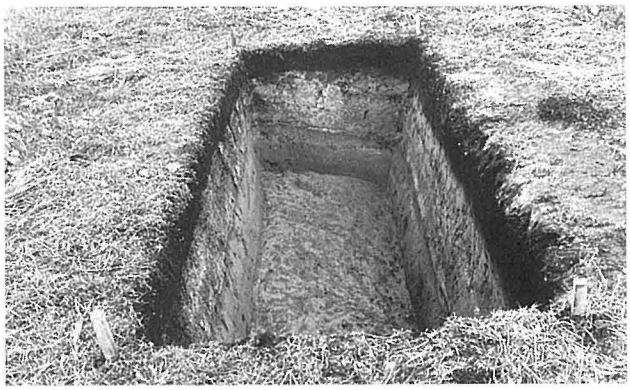
3．T-3（南から）



4．T-4（北西から）

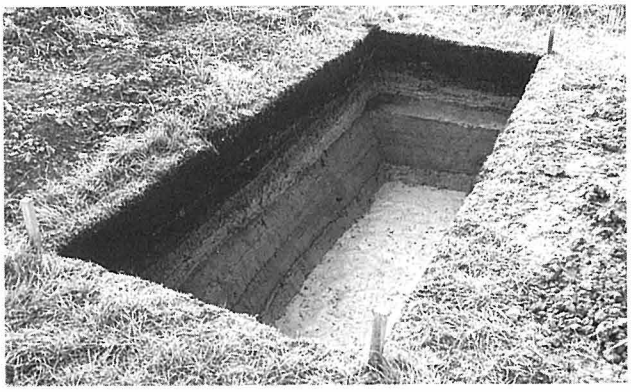


5．T-5（北から）

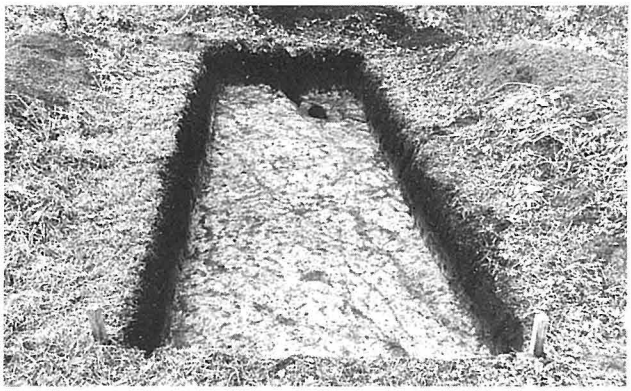


6．T-6（南から）

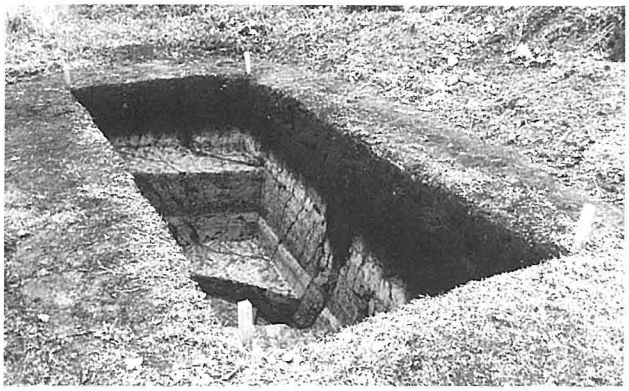
7．T-7（北から）



8．T-8（南西から）

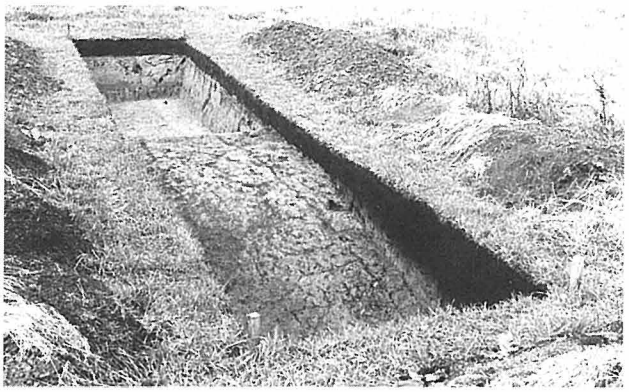


1．T-9（北から）

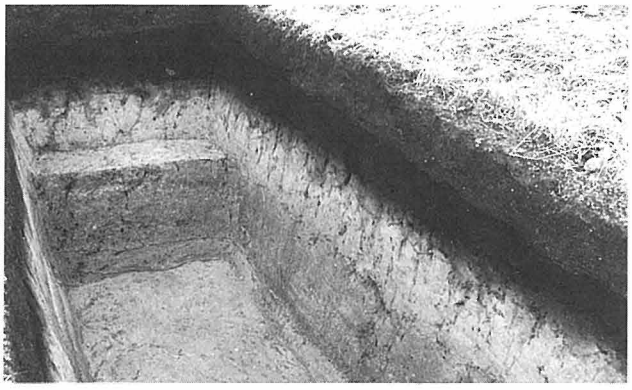


2．T-10（北東から）

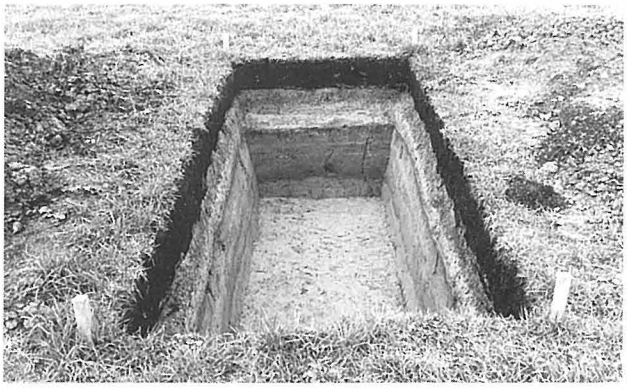
3．T-11（東から）



4．T-12（南東から）



5．T-13（北西から）



6．T-14（東から）

7．T-15（南東から）

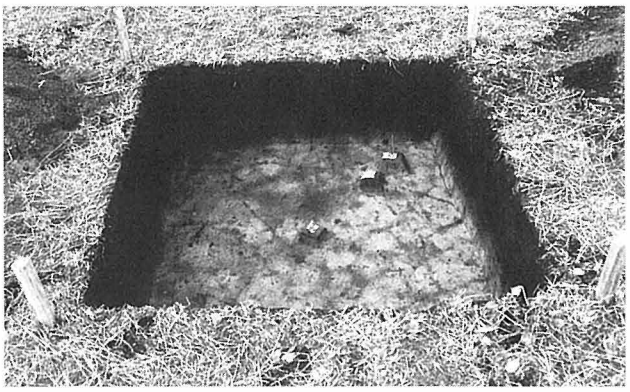
8．T-16（南西から）

図版 6

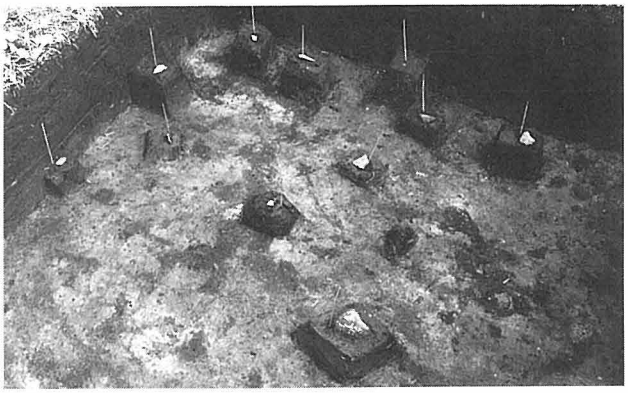
1．T-17（西から）

2．T-18（北西から）

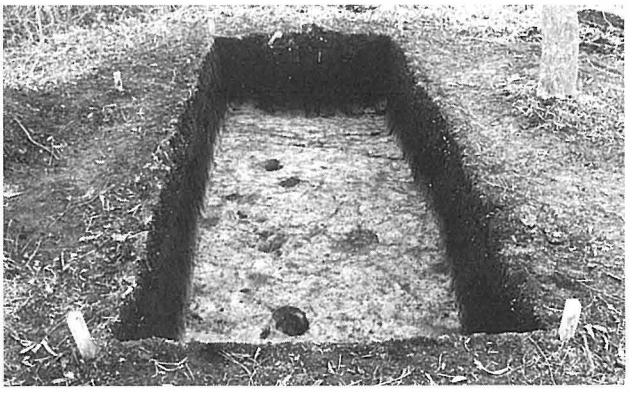
3．T-20（北から）



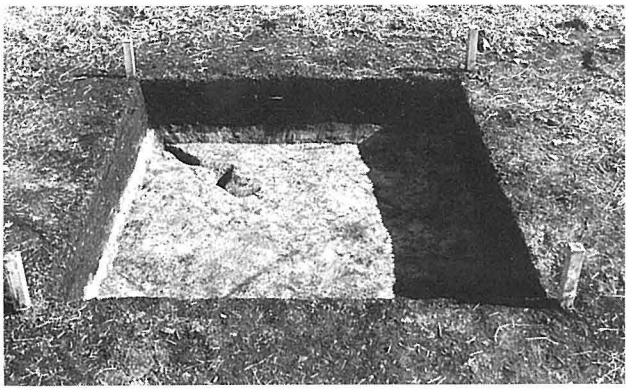
4．T-23（南から）



5．T-24（南西から）



6．T-25（北から）



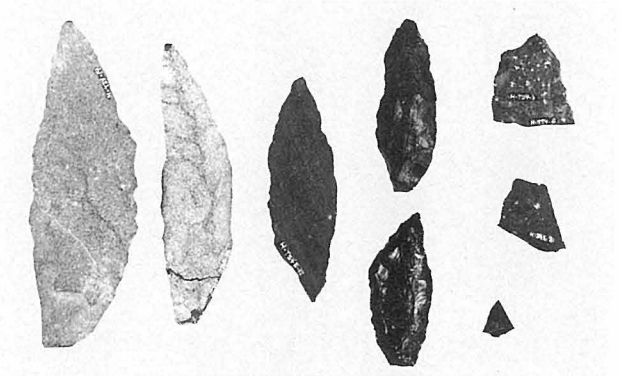
7．T-26（西から）

8．T-27（南西から）

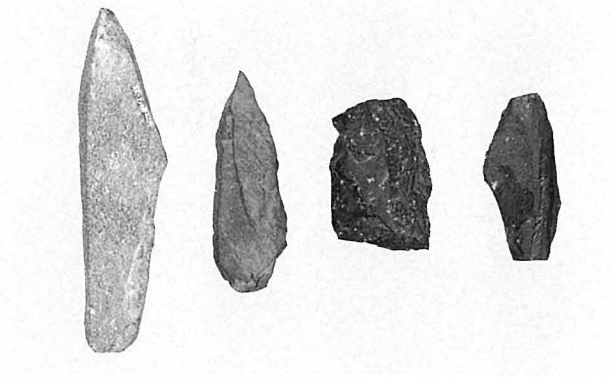
1．細石刃（表）

2．細石刃（裏）

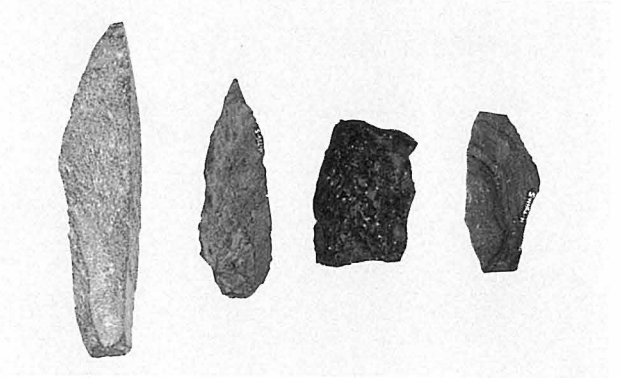
3．尖頭器①（表）



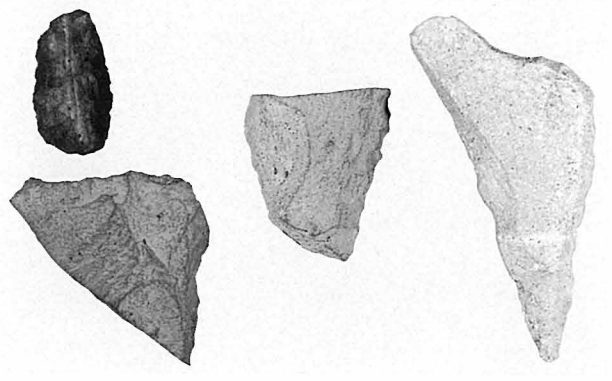
4．尖頭器①（裏）



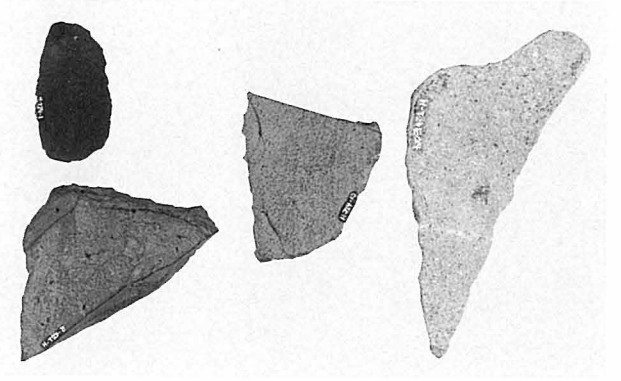
5．尖頭器②（表）



6．尖頭器②（裏）

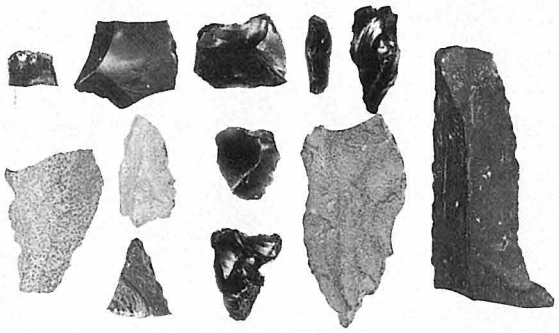


7．スクレイパー（表）

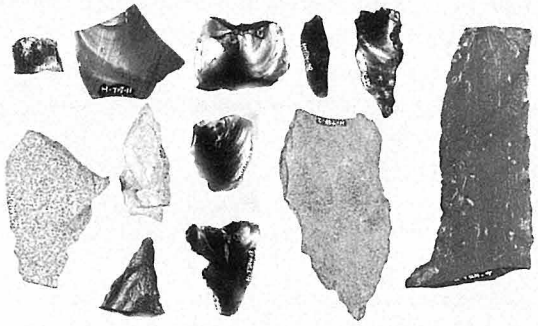


8．スクレイパー（裏）

図版 8

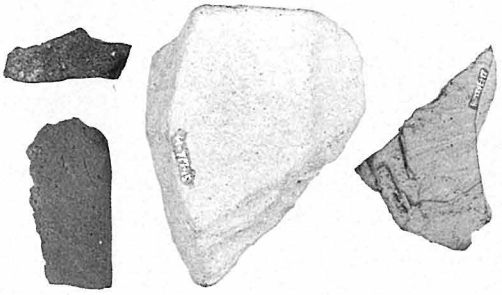


1．加工痕・使用痕のある剥片（表）



2．加工痕・使用痕のある剥片（裏）

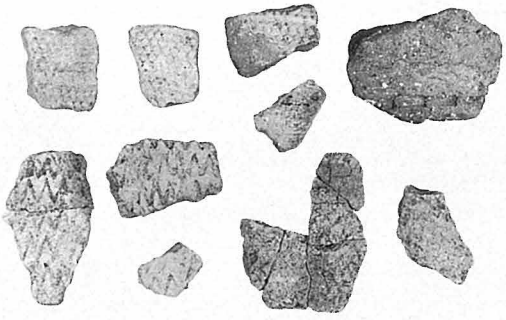
3．石　核（表）



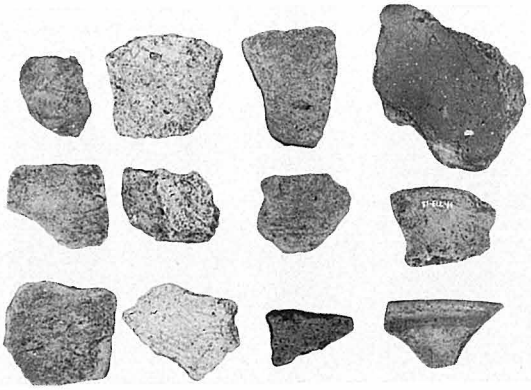
4．石　核（裏）

5．局部磨製の石器（表）

6．局部磨製の石器（裏）



7．土　器　①



8．土　器　②

報告書抄録

ふりがな	ひがしいせき
書名	東遺跡
副書名	
巻次	I
シリーズ名	蒜山文化財調査報告
シリーズ番号	1
編著者名	新谷俊典
編集発行機関	蒜山教育事務組合教育委員会
所在地	〒717-0503　岡山県真庭郡八束村大字富山根301-1　TEL0867-66-2337
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 収載遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
東遺跡 (ひがしいせき)	岡山県真庭郡 (おかやまけんまにわぐん) 八束村大字 (やつかそんおおあざ) 下長田30-14ほか (しもながた)	33588		133° 44′ 6″	35° 17′ 30″	20010618 ～ 20011203	332㎡	珪藻土 採掘

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東遺跡	散布地 集落	旧石器時代 ～ 弥生時代	落し穴状土壙　1 ピット　1	石器・礫・縄文土器	旧石器石器群を検出

蒜山文化財調査報告 1

東　遺　跡　Ⅰ

平成15年 3 月　発行

編集・発行　蒜山教育事務組合教育委員会
真庭郡八束村大字富山根301-1
印　　刷　㈲鳥取県農協印刷